

研究通信

「研究通信」第百号記念特集号

No. 100
1976年1月刊
研究会局
事務

山形大学人文学部
日本経済史研究室
(山形市小白川町)

村落社会研究会創立の頃

有賀 喜左衛門

村研がどんな経過で創立されたかをこの辺で思い出しておくことは大切であろう。私は身辺の事情で昭和四〇年頃以来村研の大会に出席しなくなり、非常に残念に思っている。大会の折に若い人々と話合う機会もないと思うので、昔話をして村研の原点がどんなものであったか伝える責任もあると思つていい。

昭和二七年に第二五回日本社会学会大会が東京大学・東京教育大学で開かれた際、村落研究に関心を持つ人々の間に村落研究の学会をほしいという話が持ちあがった。その年の一二月二〇日に発起人の会合をして、仮称村落研究会の発足をきめた。発起人の名前は服部治則、川越淳二、米林富男、武田良三、内藤完爾、中島竜太郎、中野卓、福武直、小山隆、山本登、甲田和衛、秋葉隆、有賀喜左衛門、木原健太郎、喜多野清一、関清秀、鈴木栄太郎であった。

それをみれば農村社会学の人々が多いということになるが、この時村落研究をそういう狭い専門に限らないで、できるだけ異なる専

門の人々——むしろ社会学以外の人々——と一緒になり総合的な共同研究をすることを目標にしようということが熱心に語られた。

戦後の日本では期せずして学際的な連絡をとろうとする運動がありあがった。その時に「学際的」という言葉はもちろんなかつたが、戦前のように何かの専門だけで固まるということはなくなり始めてきた。それは注目すべきことであつた。

日本常民文化研究所の創立者である渋沢敬三は戦前からこういう試みをしていたが、彼は昭和二年に六学会の連合を作り、会長におされた。その時の六学会といふのは言語、人類、考古、民族、民俗、社会の六学会であり、日本の学界にとって画期的なことであり、これは毎年共同調査と研究発表大会と年報刊行とを行なつた。昭和二三年に地理と宗教との二学会が加入し、その一、二年あと心理学会が加わり九学会となつた。そのあとで東洋音楽学会が加わり、考古学会が脱退して、現在は九学会となっている。また別に昭和二三年には東大法学部の尾高朝雄がリーダーとなり、日本人文科学会が発足し、封建制や封建遺制に関する共同の研究発表会を開いたあと、二五年頃から数年に亘って「社会的緊張」に関する大きな共同調査を行なつたことも多くの専門家による共同調査として注目すべきものであった。

こういう情勢の中で多方面の人々による共同研究を目標とする村落研究の学会を作ろうとすることは極めて当然な成行きであり、積極的な姿勢を持ったことは注目すべきである。だから発起人によって各地方の、社会学以外の専門の人々にも呼びかけが行われた。そ

して学会の樹立の準備がすすめられた。会則は必要であったが、多くの人々の希望で会則は大筋だけのものであり、むしろ会員の協力を中心にいこうといふ構えが強かった。当時まとめられた会則は次のようなものであった。

村落社会研究会会則

A 名 称 本会を村落社会研究会と称す。

B 趣 旨 本会は村落社会の研究について専門各分野の連繋を密にし、その研究の発展を期する。

C 事 業

1 研究会

a 每年共同の課題を定め、年一回課題研究に関する共同討論会を開く。

b 每年の討論大会の際翌年の課題を決定し、各自で調査研究又は共同調査を行い、次年度の討論大会において発表し、論議する。

c 共同討論大会以外に各地において調査し、研究会を頻繁に開き、又各地会員の連絡を計り、研究活動をさかんにする。

2 出 版

本会は機関誌として年報を出版する。

(下略)

3 共同調査

会員相互の共同調査を行うと共に海外の学者との連絡を密にし、併せて共同調査をも企てたい。

D 会員及会務

1 会員は村落社会研究会に関心を持ち、共同研究活動を希望する諸科学分野の研究者も以てする。

2 会費はさしあたり入会費百円、通信費百円とする。

3 本会に事務局をおく。

村研運営のために昭和二八年度に次の委員を定めた。

課題委員（有賀、喜多野、森住、甲田、塙本）

年報委員（野尻、武田、福武）

文献委員（内山、森岡）

通信連絡委員（塙本、北川、松原）

事務委員（有賀、中野、森岡）

事務委員は始めに事務局を担当した東京教育大学のメンバーである。村研の大会を討論大会と称したことには注目してほしい。新しい学会は会員の役職からはなれた自由な討論によって成立することが目標とされた。そして昭和二八年の第一回大会における課題は課題委員によつて「農地改革の村落社会に及ぼした影響」が出され、「研究通信」によつて会員の賛否を計った後決定された。

それに先立つて第一回の討論大会をどこで開くべきかが大きな問題となつた。まだどんな形の集会を持つべきかということもやはり大きな問題であり、その上に最初の大会を成功させることは村研のその後の運命にとっても重大な影響を持つと考えられた。もし失敗するとあとが続かなくなる怖れがあつたからである。

当時東北大においては中村吉治の研究室（日本経済史）と木下

彰の研究室（農業経済学）とは村落研究の人材がそろっていたし、両者とも会の結成に對して積極的であったので、誰れの見るところでも、東北大学において第一回の大会をやるのが一番いいと思われた。この考えは中村と木下に通じたので、彼らは第一回の大会を仙台で開くことを喜んで引きうけてくれることになった。

こうして第一回の村研の討論大会は昭和二八年一〇月二〇日東北大學農学研究所講堂において開催され、会員約七〇名の参加を得て、極めて熱の高いものとなつた。研究発表は井森睦平、大山彦一の司会、討論は小山隆の司会のもとに行われた。当日の研究発表は次のようなものであった。

- 1 岩手県大野郡晴山家を中心として 木下 彰（東北大）
菅野俊作（東北大）
- 2 岩手県煙山村調査 中村吉治（東北大）
島田 隆（東北大）
- 3 農地改革後の自作農 森住五郎（農業綜研）
- 4 群馬県の一山村の村落構造と農地改革 小池善吉（群馬大）
- 5 農地改革による社会移動
- 近畿水田村の一事例 — 山本 登（大阪市大）
西田春彦（和歌山大）
- 6 農地改革と村落構造

— 未墾地買収の問題を中心として — 高倉又二（宮崎大）

通例の学会より発表者一人の持時間が多く、活潑な討論もあって、充実したものとなつたことは参加者を十分に満足させた。

討論終了後に協議会が持たれ、村研の運営に関する諸問題が協議されたが、そのあと続いて行われた懇親会は爆発するように談論風発となり、第一回の討論大会の成功にすべての人々は感激し、大きな自信を持って、お互に喜び合つた。喜びの渦は大きくなるばかりで閉会もできない始末であった。ついに閉会の辞もなかつた。それはあたかも閉じることのないことを象徴したかのようであった。そしてこれがその後の村研大会の慣例となつた。これとともに中村と木下の研究室の人々の多大な助力は忘れ得ないことであった。

今日ふり返えってみれば、最初に意図したように諸科学の分野の専門家が入会するということは思つたほどに実現しなかつた。少数でも力のある人々がいたので充実していた。しかし一般にみれば専門の学会に属していたので、学際的な学会を構成することに必ずしも熱心ではなかった。このことは日本ばかりのことかどうかは知らないが、広い視野を持つことは大切であつて、実際にはむずかしいことである。私は村研のこれからの方にはこういう要素がないと研究を小さなものにすると思わざるを得ない。社会とは文化の裏返えしのようなものであるから、文化を理解しない研究には深みはないことを知つて頂きたい。（一九七五年一二月一六日稿）

あの頃の村研

中 村 吉 治

あのころは、まだ村があった。私たちの村の研究は、最高潮だった。村落社会研究会の第一回大会が開かれるについて、誘われれば

勇躍これに応ずる下地があった。村研の発生の事情も、いつからのことであるかも、まったく知らなかつたが、そのはじめての大会が仙台で開かれるというのであり、私の古くからの先輩である有賀喜左衛門名主から趣旨を聞いて、在仙の私たちのグループは、一も二もなく参加した。そして、新参のくせに、はじめから古参会員に遠慮もせず、しゃべりまくつたようである。時の勢とでもいべきか。

正面きっていえば、社会学者たちとの交流に魅力があつたということになる。諸科学の総合・共同研究ということが、そのころから、開かれるようになつていた。社会学会の中から村の研究者が分れて、専門的にその会をつくると同時に、広く経済学者や歴史学者と協力しようという意図があつたのであつたから、村研はこの新参ものたちを快く迎えてくれ、第一回大会にも並べてくれたわけであろう。バラ色の討論が期待された。

村研の集会は面白かった。学会風の報告と質疑・討論も面白かつたが、そのあともよかつた。ひつくるめて集会がたのしかつた。仙

台の第一回大会では、酒が多すぎて、仙台発の終列車まで「討論」していた会員を送りだしたあと、在仙の会員がさらにがんばつたが平らげきれず、あと何日か会場に借りた農研のどこかに、いくつものヤカンの中で滞留して始末に困るという珍現象を呈した。それはいい先例になつたかどうかわからぬが、遠慮なく胸襟をひらいて談笑裡に諸学交流の風を起すのには、多少はよき慣例となつたかも知りあげ、実現し、慣例化したことになる。

友人知人ができた。いろんなお人柄が、その人の学説とは別に知られたのも、多分有益だつたろう。しかし、社会学と歴史学と経済学などの諸学の総合や交流は、口でいうほど簡単ではないし、バラ色の夢は色あせがちだつたようである。いつの大会のあとでも、どうも話がかみあわぬという嘆きがつぶやかれた。しかし、あれこれのあとで、毎年これでよろしいといふ満足感をもつよりは、何か不満でこんどはどうしようという反省と苦慮がくりかえされる方がよかつたという気がする。何かをぶつけあう中で、そうして夜の部の談論風発の中で、何となく互いに漫透しあう何かがあつたことは疑いがないからである。一列一体に結論は同じになる報告や決議が行われる風にならないところがよかつたのではないか。累積された年報の各自の研究論文は、一つの方向や色彩を帯びないで、各自の研究たるを失つていない。その量も目をみはるほどになつた。これでいい。まだ二〇年だ。急ぐこともあるまい。

妙なことになつてきたのは、会の方ではなくて、村の方である。村が生きものであることを、これほど強烈に示すことが目前に展開されると、あのころでは思いもよらなかつた。歴史の中だけに見えた村の変革のあらしが、現在のこととして吹きあれるようになつた。いまやどうやら村がなくなつてゆきそうなあんぱいである。都市化だの離農だのという言葉ばかりが聞かれるようでもある。機械化だの借金だの、村研も忙しいことになるようである。

ところで、このごろ安孫子驛に聞いたことだが、村の中には、今こうした出稼や離農者など、農業を主としない人たちを「むだ人」

と呼ぶことが依然としてあるという。東北のある村の話だが。その地方でも他と同じく、農外労働が多様化し、農外収入が多くなり、専業農家が減ってゆくのだが、そこで農外の仕事を主としてゆく人たちを「むだ人」というのだそうである。うまい言葉である。おもしろい言葉だ。中世では、農から離れた人、土地によらない生活者を、すべて職人と呼んだ。手工業者も絵師も学者も伎芸の徒もすべてである。職人という漢字でなく、民衆の言葉で何といつたか不明だが、通常村落共同体からはみ出た人、つまりは通常の働きでない者という意味である。やや蔑視したり、聖視したりしている。そういうものとして「むだ人」と似かよったいたががあったかも知れぬ。古代になると、農から離れ、土地から離れた生活者は、はつきり賤民か聖である。奴隸はその代表だろう。こんな伝統的な感覚が、村人の中にはまだあるのではないか。變つてはきたが、村はなかなかならない。村研は忙しくなりこそすれ、まだまだやることはなくなりそうもない。しかし、村研の会員のごときは、まっさきに「むだ人」とされるだろう。憂うことなけれ。いつの世でも、その当世の「むだ人」は、そのことの故に次の世の主導となつた。村研は大いに「むだ会」になるがよろしく、会員は大いに「むだ人」になるがよからう。当世に有用な会になるなけれ。

村研草創の頃

川 越 淳 二

「きみーい、むらの研究やつているんだろう。一緒にやろうじゃ

ないか」。ポンと肩をたたかれて振り返ると、白髪童顔の大先生がこちらをむいてニコッと笑つた。たしか、一九五二年一〇月二六日、二五回社会学会大会の二日目、東大山上会議所での懇親会の席上であつたとおもう。当時の私はほんのかけだしで、特別の指導者にしながら、岐阜県美濃地方のいわゆる輪中地域を調査していた頃である。学会での口頭報告も五つ、書いたものもわずか三篇に過ぎなかつた。恩師や先輩のご推薦によるものと思うが、こう直接大先生から声をかけられると、まったく恐懼感激の態であつた。「はあ」。「じゃあ、発起人に加えるからね」。こういわれておもわず「よろしくお願ひします」と答えてから、急に不安になつた。「一体、大先生と一緒にやっていけるだろうか」。しかし同時に、何ともいえない嬉しさがこみあげて來た。「これでいろいろ教えて頂ける」と。これが発足当時の村研と私とのかかわりあいであった。それから翌年二月まで三回の打合せ会のご連絡を頂いたが、これは欠席した。新幹線はまだ開通せず、上京するには往復夜行によらなければならなかつた。それまで六回「研究通信」が送られてきた。最初は殆んど読めないような手刷の「通信」だったが、隅から隅までくり返えして読んだ。そして大会の日を、子供のように、待ちに待つた。

東北大農研の第一回大会での報告は、残念ながら殆んど記憶がな

い。ただ熱氣でムンムンした共同討議が終つても、誰一人退席しよ

うとするものがなかつたこと、そのため閉会の辞もなかつたこと、皆一様に去り難い氣持で一杯だつたことだけが記憶に残つてゐる。

こんな感激はそれ以前もそれ以後もない。懇親会の記憶もないが、上り終列車を待つて駅前の一一杯呑屋で、有賀、中村、竹内の諸先生と一刻を過したことだけが妙に頭に残つてゐる。これが本当に研究者の集りなのだ。これに一生を托してみよう。そんな氣持で一杯であつた。

村研への慕情はつのるばかりであつたが、地理的な関係や旅費の都合で毎回の研究会や打合せ会には全く出席できなかつた。

翌年一〇月教育大学で開かれた第二回大会には大きな期待を持つて出席した。しかし正直にいって希望は果されなかつた。これは一年間の研究会に出席できなかつたためからくる「共同討議」への参加の困難さと「もどかしさ」、第一回大会にみられたあの熱気がここでは感ぜられなかつたためである。大会後の協議会に出席しながらも、そこでの論議があまりに「アップ・ツウ・ディト」すぎる

と感じないわけにいかなかつた。そのためもあって、大阪での第三回大会は、前々日に社会学会大会が九人で開かれたあとを九州流行に費やして、欠席した。しかしその後送られてきた「通信」や共同討議の記録を読んで出席しなかつたことを悔むと同時に、村研にたいする私の姿勢がいい加減なものであつたことを反省させられた。

とくに殆んど毎号のせられる有賀先生の記事に深く心をうたれた。肩を叩いて勧められたときの感激をもう忘れたのか、と自らを諫め

たりした。

第四回、第五回と、大会には眞面目に出席し、報告に耳を傾け、討論に参加し、求められれば「通信」に原稿を送り、私なりに努力をした。しかし、いま「通信」の復刻版を読み返えしてみると、やはり地方在住者としての私なりの不満や希望がのべられている。同志的結合といわれた村研の、いわばインフォーマルな討議の場が欲しかつた。そこでこそかみしもを脱いだ本当の討議と勉強ができるとおもつたからである。

いまでは慣例になつてゐる「宿泊による大会」が念願であった。「通信」にもその希望をのべた投稿をした。この提案は在京の方々の真剣な検討と会員の意見の集約という順序を踏んで、ついに第六回大会が、いまでも想い出話となる鳴子温泉での宿泊大会として実現した。そこではじめて期待されたインフォーマルな討議、というか、調査研究の裏話をじっくりうかがうことができた。「村研はよみがえつた」。多分そう感じたのは私だけではなかつたと思う。

発足以来、四分の一世紀近くたつた。同志的結合の節となつた「通信」も一〇〇号を算えることとなつた。新しい会員も増え、その将来は期待されているが、いま一度、「農研」や「鳴子」での感激を味つてみたい。これが発足当時からのあまり有能でない一会员の偽わらざるいまの感想である。

初期の村研

小池基之

「村研」つまり村落社会研究会が設立されたのは昭和二八（一九五三）年一月のことであった。原案には村落社会研究会という会名があげられていたが、設立準備会で村落社会研究会と決定したということである。「研究通信」を読みかえしてみると——この小文は「研究通信」と記憶をたよりに書いているので、そこからしても「研究通信」の覆刻は大変有難いことであった——第三号に、その年の五月一七日におこなわれた宿題委員会の記事があつて、そこに私が出席しているので、私が入会したのはその年の四月一八日から五月一七日の間であるということになる。社会学関係の人達がまず中心になつて創立準備をすすめられ、会則にもあるように（D会員及会務）「共同の研究活動を希望する諸科学分野の研究者をひろく含める」という主旨から、社会学以外の研究者にも次第に共同研究活動への参加がよびかけられたのである。

大会は共同討論大会とよばれていて、第一回大会の宿題は「農地改革の村落構造に及ぼした影響」というのであった。そしてその年の一〇月一三日東北大学においておこなわれた。その成果は年報第二集におさめられているが、それに先立つ年報第一集は「村落社会研究の成果と課題」と題して、その年の一二月末原稿〆切といふことで、大会準備と並行してすすめられた。ところで年報第一集の「理論と方法」の経済学の項を私が書くことになつたのが（「通信」第三号）、途中で変更になった（「通信」第九号）のは、私のフランス留学が急遽決定して、その年の九月に出発することになつたからで、したがつて第一回の村研大会には私は出席していない。

私がはじめて大会に出席したのはフランス留学から帰つてからの第三回大会以後で、「農村人口の変動と家族の構造」という課題を掲げたこの第三回大会に私は「農村生産力と農村過剰人口」と題して、福島県東白川郡の事例を中心として、報告した。この大会は毎日新聞社の後援のもとに、昭和三〇年一〇月一八日同新聞大阪本社講堂で開催された。報告原稿をかかえて、桜橋から堂島に向う途には、折柄小雨がしとしと降つていた。

こんなことを振返つて思いおこしていると、初期の「村研」には二つの大きな特徴がみられるようと思われる。その一つは、大会が必ずしも合宿という形をとつていいこと、も一つは共同討論大会というよび方が具体的に示してある如く、大会が共同討論という一点にしばられていたことである。「村研」という学会は「むら」を研究対象とする学会だけあって、共同体的色合いの濃いことを感ずるし、そこにまた多分に「村研」の「良さ」を見出すものである。たとえば、元來「村研」大会には閉会の挨拶などといふものではなくて、懇親会は、興あれば留まり、興尽くれば自ら散づるといふものであった。そしてこのような村研「共同体」がその紐帶とするところは、まさに、宿題として提示された共通課題をめぐる共同討論であったというべきである。

昭和三二年一月二三日・二四日東京大学でおこなわれた第五回大会で、はじめて会期を二日に延長し、共通課題とならんと自由課題報告を設けることになった。会員数の増加とともに、限定され

応えたものであった。これをいわば過渡的な形態として、翌第六回では宿泊大会という形がとられる事になる。その意図は「一切の制約から離れて」、「くつろぎながら時間の経過も忘れて討論を行えば必ずや実り多い大会を期待できる」であろうし、また「こうしたところに村研本来の姿を再び見出すことも出来るかと思」う

（『研究通信』第二八号）というところにあって、その企画は充分に達成されたようと思われる。そして、その年の共通課題は、奇しくも「村落共同体」であったのである。

それ以来、「村研」大会は参加研究者会員が合宿し討論を交すという、きわめてユニークな形が定着することになる。このような点で、鳴子温泉「農民の家」でおこなわれた第六回大会（昭和三三年一〇月七・八日）は「村研」にとって劃期的な意義をもつものであった。

もつともこのような企画の根底には、「通信」第二八号が「集団全体の性格が形式化され」るという形で表現しているような、すこしオーバーな云い方をつかって差支えなければ、「村研」自体が当

面していたある意味での「危機」からの、脱却という問題があったことは、否定しえない。だが、会員各自の専攻領域が広汎圏に亘り、かならずしもつねに共通課題に焦点が合うとはいえないこと、また

共通課題にしても、歴史と現状分析、社会学・法学・経済学等々から接近といつたことをあまねく配慮することの難しさは、覆うべくもない。それだけに、こうした宿泊大会といった形態が定着化するにつれて、「紐帶」がこのような形態自体に、より多く倚りかか

るようになりはしないか、ということを気にしないではいられない。

もちろん、私は宿泊大会といった形を否定するものではけっしてない。むしろ、このような形は「村研」独自の大会のあり方として、今後もずっと継続されることを切に望むものである。そのうえで、大会を、会員各自の専門分野における独自の研究成果を縦横に発表する機会とすると同時に、「宿題」——これは極めて含蓄のある表現であると思うが——として宿題委員会において充分検討され、提示された共通課題をめぐっての、自分の専門にこだわらない自由な討論の場たらしめることを、すなわち、かつては大会は「共同討論大会」であったこと——村研「共同体」の紐帶はまさにそれだと思うのだが——の意義を、宿泊大会という独自の形態を充分に生かす意味でも、再び初心にかえって検討してみてもいいのではなかろうか。

ともあれ、年報は時潮社版、培養房版、それに今回の御茶の水書房刊行の分を含めて二〇巻を数えるにいたったし、『研究通信』も百号になった。御同慶に堪えない。

会員諸君、今後も大いになお一層頑張りましょう。

村落形成過程の原型の研究

閔 清 彦

その頃、わたくしは、いわば村落形成過程の原型をみる思いで、北海道の開拓村落の調査を手がけていた。当時、国すなわち北海道開発庁は、大規模かつ集中的な国家投資を行ない、北海道に新しい

タイプの村づくりを試みていた。それは二種類あって、一つは大規模経営の純酪農村、他はやはり大規模経営の純水田村であった。前者は北海道東部・根釧原野の火山灰地帯、後者は道中央部・篠津原野の泥炭地帯にかかる機械化開墾の実験的な試みというべきものである。

開発そのものは、当初の段階では、自然の荒蕪地を切り拓くといふ殆んど全くフィジカルなものであり、耕地の造成が終了し、やがて農家の入植段階に入つても農業経営をめぐる経済的課題が村づくり計画の中心と考えられていた。そういう中にあって私が関心をもつたのは、新しい村の形成過程で、そこに参加する農民の人間関係すなわちソーシャルなものがどういう意味をもつか、ということであつた。

調査は十余年にわたって続けられた。

国費の大規模投下だけではなく世界銀行からの融資も導入されてから、その開発効果の計算はもとより極めて綿密に行なわれ、当時流行したコスト・ベネフィット・レーショウなる計算式が金科玉条のごとく、経済効果の測定指標として採用されていた。しかし、私が疑問に感じたのは、各地から集まつてくる農家によって全く新たにつくられる村落集団の開発効果が、物量計算方式だけによつて測り得るのか、ということであった。入植農家は、これまでの社会的背景も異なり、与えられた土地条件も異なり、農業経営法にたいする経験や好みも異なり、また、それぞれの個人的資質も異なるわけであるから、こういった人々が相集まって、新しい村を形成していくとき、どういう人間的結合やあるいは離反が起るか、そして、

そのことが実は各農家の生産効率の大小にも強い影響を与えたはしないであろうか、ということであった。

社会学は、村落研究の領域にだけ限つてみても、実践的政策的側面に大きな貢献をしてきたと思う。農民意識や村の集団構造の解明を通じて、農村の民主化や富農に関する新しい方策を提案してきた功績は、否定しえない事実である。しかし、私が考えたのは、政治、経済の領域にふみこんでいくほかに、いわば社会学プロパーの領域から、ソーシャルな固有の問題を対象として社会学的発言を行なつてみたい、ということであった。

パイロット・ファームと呼ばれる酪農村の建設事業を、私は研究の対象に選んだ。冒頭に述べた二種類のうち前者の方である。その調査は余年にわたつて続けられた。

村落社会研究会が、学際的な異色の学会として独自の発足をした頃、私はこのようない意図をもつて研究していたので、当時はまだ余り知られていないかった北海道村落の状況を学界に提供してみたい、と考えていたのである。その成果の一部は後に「社会学評論」五二号に発表したが、村の形成過程と家とのかかわりあいに家族集団が極めて大きな役割を果し、ほとんど独立変数としての意義をもつてゐる事実を、「一家入植型」と「分家入植型」という類型化によって解説することができた。

八郎潟などの事情は見ていないが、その後、さらに道北部のサロベツ原野にある既存開拓部落の調査を十年間継続してみて、右の結果の妥当性を、この地域においてもほぼ検証しえたと考へてゐる。

村研の「村長」であつた頃

村長 利根朗

この奇態な標題は私がえらんだのではない。去る秋の村研の大会で、あらたに事務局を引き受けた大学の誰かが、会場のロビーでコカコーラでも飲みながらふと思いついた、というのが事のいきさつらしい。その誰かも、この「村研の村長さん」のいわれを目撃していたわけではない。当時まだ中学生ぐらいであったはずだから。村研の第一回大会は一九五三年の秋に、東北大学の農学研究所の講堂で開かれた。その研究発表の中、舞台の袖に「村研の村長さんおいででしたから受け付けまでおいで下さい」と差紙が出た。昨今はそういうことをしないが、まずいことにその時は最前列近くで熱心に発表を聴いていた。満座の視線を浴びて、と思いながら下うつむいて玄関に出ると友人の工学部の助手が、学割を貸してくれという。会が果て何人かが農学研究所の菅野俊作さんの部屋へ流れこんだ。有賀喜左衛門先生が傍の誰かに「村研のソンチヨウさんとは何のことかね」とたずねていた。有賀さんの方が村研の「村長」さんにふさわしい風貌であった。そういうわけで、「村研の村長であつた頃」というのは会の創立当時を指すというのが編輯者のつもりらしい。だしかに村研創立からの会員ではあるのだがたいした自覚をもつて会員になつたわけでもない。どういう趣旨で村研が作られたのかも知らなかつた。私はその春卒業したばかりであったが、その二年ほど前から中村吉治先生を中心とする南部藩煙山村の研究が始つて

いた。私も文字どおり諸先生にくつづいて幾度か煙山村に行つてから、村落を研究するのは至極当然と無意識のうちに会員になつてしまつて。当時、一方では学生が農村に入つてゆくことがはやつていた。農地は解放されたが農村に封建制は本質的には残つてゐるという発想から、戦後の農村に共同体をみつけようとしたわけである。こちらの方はその後の政変で、農村に共同体はなくともいいことになつてしまつたが、村研の方はそんなこととはかわりなくその後二〇年余つがなく成長して來た。私の村落への関心も持続している。煙山村の研究を通じて教えられた村落研究の方法が當時から一貫して私の村落にたいする見方を支配している。共同体を見ようということである。

土地を所有しみずから鍼を振る農家の、直接の、商品交換を媒介としない、生産や生活のための社会関係が村という農民の繋りにならう。農業従事者が集住しているということだけでは村と呼ぶかいらない。昨年の村研大会の時に、ネムの郷で暮夜散歩しながら、近代社会で村落を問題にするのはもともとおかしなことだと、咳いたら、現実に村があるではないか、と言下に一蹴されてしまった。日本の近代社会に「村」があつて政治的にも経済的にもいろいろ意味をもつてゐることはまぎれもないことだが、村研がその「村」を追求しているとは必ずしも思えぬふしがある。完全に自立した後の小生産者の集団やその分解のことは村研本来の課題ではなかろう。近代社会で「村」を分析しようとすれば、多かれ少なかれ前近代的な要素、家の共同体としての結びつきを捉えることにある。それには

歴史的視点が必要になる。前近代社会に興味があつて村研に出て来る者と、現代社会に重要な関心があつて現存する「村」を分析しようとすると、どこので交流できるのでないと村研の意義は失われる。農業を対象とするのだから村落社会研究会でいいというものではない。もっとも、歴史学の方でも、村落構造というと土地所有の階層構成であつたり、共同体と制度化された行政区画と区別しかかりするからあまりあてにも出来ないが、村研では農業経済学やただの社会学だけでは解けない、家の村落的・共同体的結合の謎をなるべく多く俎上に上げられるようにしてほしい。そんなことはわかつてしまつたから課題は更に先にすんでいるのだ、という状況にはまだ達していないと思う。村研の創成期に、村それ自体の探究の意気込みが強かった。村研が単なる地域社会一般を研究するだけなら、村長もいられなくなる。この小文の結末を、「私は村研の町長にはなれない」としたらどうか、と親切なアドバイスをしてくれた人もいる。

雑

—予見と実証と—

竹内利美

一九七五年農業センサスの『農家調査結果概要』が、この十月十六日に公表された。農家総数は五年間に六・三%減って四九五・三万戸（昭和二五・六一七・六万戸）、そのうち専農六一・六万、一種兼農一二五・九万、二種兼農三〇七・八万。專業別構成比はそのため、専農一二・四%，一種兼農二五・四%，二種兼農六二・一%

となり、十年前の専農二一・五%，一種兼農三六・七%に対し二種兼農四一・八%という構成は、全く逆転した形になつてゐる。しかもこれから北海道の専農率四二・八%を除外すれば、東北・北陸・東海・近畿・山陰の各地域は軒並みに専農率一〇%を割り、逆にすべての都府県で二種兼農の比率は五〇%をはるかに超えているのである。だから男子農業専従者（一五〇日以上）のいる農家比率も変って、専農七二・九%，一種兼農六九・三%，二種兼農九・四%となり、ここ五年間に約六七万戸を減じて、全農家の三二・五%にとどまる。つまり三分の二の農家は男子専従者不在で農業經營をしていくことになり、北陸・近畿・山陽などではさらに上まわり約八割に達するという。

農家増減の分岐点はほぼ二・五ヘクタールの経営規模に移り、若干上層農は増加しているが、その実数は一四・九万戸程度で、その増え方も鈍化している。これに対しここ五年間に一・〇%一・五% クタール層は一六・九%，一・五%二・〇%ヘクタール層は一四・一%と大幅に減少した。ただし〇・三ヘクタール未満層はさして動いておらず、都府県では全体の二三・二%を占め、これに〇・五ヘクタール未満層を加えると、総農家数の一・二%に達する。だから東海・近畿・山陽などの各地域では半数以上の農家はこうした零細経営農家ということになるといふ。

農家人口の動きもしたがつて激しく、二・三一九・五万人（昭和二五・三・七六七万人）にくだつて、ここ五年間に一二・八%減り、全人口に対し二一・一%を占めるにすぎない。昭和二十五年の四六・

一気にくらべると、二十五年のうちに二五%減少したことになるわけである。それにもまして、農業就業人口の減り方はいちじるしく、四五五年の一・〇三二万人から二三・六%減って、七九〇・七万人になり、しかも男子就業者が目立つ。男子別構成比はほぼ三八対六二である。さらにこのうちから年間一五〇日以上の就業者をしほると、三七七・三万人（男子一八一万人）、五年間の減少率は三二・八%に及んでいる。それゆえ、農家一戸当たりの世帯員数も四・六八人（昭和二五、六・一人）に減少したが、一五〇日以上の農業従事者は一世帯当たり〇・八人となり、男子については〇・四人ということになっている。

以上とりとめもなく数字ばかりならべたが、別段これを分析して物をいうつもりはない。それにこんな数字は、私など門外漢がことあたらしく持ち出すまでもなく、すでにおわかたの周知しているところである。ただこうした淡淡たる数字をならべただけでも、ここ二十五年における日本農村のはげしい変動が身にしみて感じられ、この動きを追ってきた村落社会研究会の歩みを何となくふりかえってもみたくなるのである。

幸に今回御茶の水書房の御厚志で時潮社版『村落社会研究』の旧巻（九冊）が完全復刻されることになった。そこで改めて各巻のテーマをみると、農地改革からはじまって、村落共同体論、農村過剰人口、農政の動向と村落、農民層分解と農民組織等々ということになり、これにつづいての岩波新書版『村落社会研究』の各巻テーマはすでに御承知のとおりである。どれも現下の切実な課題をとらえて、

着実な現状分析に努力し、あくまでも実証的態度を堅持しつつ、そのうえにおのずから何らかの「予見」を生み出そうとしたことは、一貫した私たちの態度ではなかつたかと感ぜられるのだが、その「跡追い」は少々甘く、むしろ目まぐるしく変動する農村社会の波に次々に乗り移ることに、いささかとらわれすぎてきただけではないかという感じがしないでもない。たとえば、「農村過剩人口」の問題などは、今でははるか昔の話になつたが、いささか暗い当時の「予見」はわずか数年にして一変した事態に際会したにもかかわらず、ただ一回で終つていて、政治体制（農政）・農民層分解といいう新しい波を追う結果になつてはいまいか。もちろん農民層分解は重要な課題で、多くの収穫をもたらしたものたしかではあるが、現下の情勢に対比してみると、私たちの「予見」は果してどうなつているのか。——仔細に過去をふりかえつてみると、いろいろの問題が新しく発見されそうにも思えるのである。

並木正吉氏の「農村は變る」は昭和三五年に出された「岩波新書」の一篇であるが、いち早く農村人口のはげしい流出をふまえて、多くの卓見を提示された記念すべき労作といってよかつた。そして、若い人々のその後の農村研究にもかなりの影響を与えてゐるようで、私などもこの本から教えられるところがすくなくなかつた。そこでは若年層を主体とする急激な農村人口の流出と、新しい村の動きとしての「専農志向」の少數精銳分子の抬頭とを、対比的に描き出しつつ「農家再編」の動向を示唆していた。いわゆる「地すべり」の現象の実態のあざやかな分析であり、「農家から青年が減ること

は決してマイナスではなく、むしろ農業近代化の大きな契機であり、後継ぎを残せるごく少数の自立經營農家こそ、開放經濟に抵抗力を持つようになる」として、かくて淘汰された後に残存する少數精銳

農家に今後の農業經營の主たる荷い手たることを期待された論旨が特に印象深かったように思う。しかし、その後十数年の経過は果してどうであろうか。

農業統計の質をこらであらためて吟味する必要を感じるほど、今回の御役所の数字からみると、どうもこうした卓見もいささか裏切られたように思われる。たしかに二・五ヘクタール以上の専農層は幾分厚みを加え、いわゆる少數精銳分子の充実がみられぬでもないが、その数は知れたものであり、しかも近年はその動きが鈍化しつつもあるらしい。米作中心とはい、日本の農業が脆弱な兼業農家によつて荷わられているという一般情勢は依然として変らず、さらに深化の様相さえ示しているらしい。素人の全くの思いつきで、並木氏には大変失礼の申し分ではあるが、実証研究からみちびきだされる「予見」について、一応過去をふりかえってみてもよい時期ではないかと思いついたまま、ひとつの一例にさせて頂いただけである。

いささか妙な発言になつたが、要はここで村落社会研究会二十五年の歩みを回顧しつつ、「当るも八卦、当らぬも八卦」で、卒直に過去の「実証と予見」の「跡追い」をしてみるのも、ひとつの行き方ではあるまいかと感じているだけである。

『研究通信』一号発刊のころ

塚 本 哲 人

『研究通信』一号は、一九五三年三月に発行された。その一号をいま手にして、当時のことを想い出している。手元には、山形大学人文学部日本經濟史研究室を事務局として発刊された最新の『研究通信』九九号もある。両者をくらべると、私たち素人の謄写印刷でつくった一号の体裁の拙さが、何としてもきわだつてゐる。それだけ感慨ひとしおるべきか。

「村落社会研究会の発足にあたり」と題する有賀喜左衛門先生の一文が、その一号の冒頭を飾つてゐる。「決して本会を代表したのではありませんが、研究会の成長を心から祈りつゝ、会員の皆様に御挨拶申上げます」と結ばれてゐるこの文章には、先生のお人柄がにじみでてゐる。美辞麗句を連ねることなく、ただ切々と「この会の目的を達成する道」として、「同志の結合を強めるための基本的な考え方と方法を持つこと」と、「我々の研究成果を現状の危機において日本人の生き方の上に大きく生かしたいという熱望」にあることといふ二つを説いておられる。村落発足の初心を、ここにみる想いである。

村落研究者の組織をつくつてはどうかという話が出てきたのは、一九五二年の夏ごろではなかつたかと思う。五〇年代に入つていよいよ盛になった農村社会の共同研究において、社会学研究者がいわば主導的立場にたつて隣接諸科学研究者の協力を得て行うという事例がようやく実施されるようになつてきたことが、その背景にあつ

たことは否定できない。そして、同年十一月から準備の打合せ会がもたれ、年一回の討論会の開催と年報の出版のほかに、各地で研究集会を開くことと、会員の平素の通信連絡を万難を排してもやっていくことが決まった。そこで生れたのが「研究通信」であった。しかし、当時の学会でそうした研究通信を出していたところはほとんどなかった。研究会の本部は有賀先生のおられた東京教育大学の社会学研究室であって、先生と中野卓・森岡清美の三氏が本部事務委員となり、福武直・武田良三の両先生が主として年報の編集・出版のことがあたらされたが、通信編集部は私たちの本郷の研究室であった。当時の助手は私に北川隆吉君。その年四月には松原治郎君が大学院に進学してきた。編集・印刷の技術をはじめ何もかもないなかで始められた「研究通信」の発行であった。

印刷については三号からプロに外注することになるが、一号と二号は、北川・松原両君と私の三人で刷り上げたと記憶している。両号とも、編集は拙く、印刷は汚い。一号をご覧になって二号に「研究通信への期待」をよせられた喜多野清一先生からは、「村居炉辺の一興」と評され、川越淳二氏から三号で「読むのに一苦労」と指摘される始末であった。また中野卓本部事務委員は、この「不評判を挽回する印刷が可能」になるための「会計上の見通しの好転」を二号の「中間的会計報告」で訴えなければならなかつた。たしかに、おおせのとおりである。あの研究室の一隅で手をまくるにして三人で刷り上げ、いざ発送という段になつて、少しでも読めるものと選別した記憶が、今に残つている。私はとにかく悪筆である。北

川・松原両君は決して字が上手というほどではない。北川君と松原君は、学生時代にピラなど切つた経験があつたと思うが、私にはその経験もなかつた。いまにして思えば、ずいぶん無茶をしたものである。

しかし、曲りなりにも一号と二号を出すことができたのは、北川・松原両君がいたからである。北川君は、学会のあり方、そして研究者のいきざまについて独自の見解をすでにもつっていた。彼の立場からすれば、村研の行き方、とくに研究通信の発行はとくに推進すべきものであった。それだけに熱っぽく鉛筆をにぎつてくれたと思う。松原君も、新進の気負いをもつてガリ板にむかい、ローラーをおしゃれていた。しかし、こうした作業は、すべて暗くなつてからであった。東大文学部中庭の暗さが想い出されてならない。それだけに、一九五三年四月以降、同年秋の仙台での第一回の集会まで、精力的に「研究通信」の編集に取り組んだとの印象が、今に鮮烈である。そのためか、中村吉治・木下彰・竹内利美の諸先生たちのお世話で、閉会の辞のないあの集会が楽しく終つたときのことが、これまで追憶に鮮かである。そのときは思つてもみなかつた仙台に住みついた私は、もうすぐ二十年になる。時の流れを感じないわけにはいかない。

その流れについておわりにひとこと。「研究通信」一号には島崎穂君の「発足に期待する」が収載されている。「わたしは村落社会学には、門外漢であるが」と書きたさているこの文章は、伝統的な村落社会学的事例研究を批判し、隣接諸科学の人も参加するこの

会に期待し、欣然参加するとして、「といって、村落社会学が、急に田舎娘の厚化粧になつても困るが」と結んでいる。たしか、村落

研究者群の周辺にいる若手にも仲間になつてもらおうという意図から寄せていただいた一文であった。島崎君のその後の本会での大活躍を想うにつけ時の流れを感じるとともに、彼の農村研究の発展に集中的に表現されているような『研究通信』一〇〇号発行までの道程の意義をあらためて知る想いである。

第一回研究会（東北地区）

ある一月七日（水）午後一時より、山形大学人文学部会議室で、「島崎穂会員の問題提起をめぐって」というテーマで、宿題委員および東北地区在住会員に参加を呼びかけ、第一回研究会を開催した。新年早々なので各会員の個人的事情もあり、報告者を依頼することができなかつたため、出席不可能な宿題委員からは書面で意見を寄せて頂くとともに、参加者にはあらかじめ話題提供をお願いしておいた。討議の内容はおおむねつぎのとおりで、出席者としては今年度大会の共通課題は、

（岩本）（事務局）あけましておめでとうございます。松もとれないうちから、お集まり願つて大変恐縮ですが、何分今年は大会の共通課題が決つていないので、事務局としては正月とはいっても安閑としておれません。幸い前号の『研究通信』で島崎穂会員から積極的な問題提起がありましたんで、今日はそれをめぐって討論するとともに、皆さんからそれに関連する話題提供をして頂きたいと思います。なお、その前に今日、御出席なれない方で、宿題委員の安原茂会員と長谷川宏会員、それに雪江美久会員から書面にて御意見が寄せられておりますので、私の方から御紹介致しましよう。

まず、安原会員からは、

「（前略）さて共通課題の件ですが、基本的には島崎会員の提案に賛成です。しかし、これを、どう具体化するかは、まだ小生にもはつきりしません。ただ、次の諸点は当然必要でしょう。①、生活破壊・の実態認識。しかもこの場合、「破壊」というのは、弁証法的に理解されねばならないようと思われます。「破壊」されつつも、そこに新たな展開の問題もあわせ考えねばならぬからです。②、破壊・に対するスタンダードな農民生活像の把握。③、生活構造ないし生活組織に関する古典的理論の再検討。とりあえず以上のようなことです。こんなことをもう少し展開して考えてみたいと思います。

なお、島崎会員から「共通課題」は、「農民の生活」をめぐる問題」ということでなく、単純に「生活破壊」というタイトルではないかとお伝えしてくれとのことです。」

農村生活の歴史と現状

—農民にとっての“生活破壊”とは何か—

としたらよいではないかという結論に達した。今後、宿題委員会および運営委員会での検討をえた上で、正式に決定されることが望まれる。出席者は、安孫子麟（宮城教育大）・勝又猛（山形大）・細谷昂（東北大）・森芳三（山形大）・岩本由輝（事務局）の五名。

というお便りを頂いています。つぎに長谷川会員は、

「島崎会員が提案された「農民にとっての・生活破壊」とは何かを問う」という共通課題は、これまでの「資本主義と家」の問題関心を持続させながら、それをより具体化したテーマであるということはもとより、伝統的な生活の枠組を崩されつつも、そこから新しい生活の枠組を生み出してゆく農民の自主的エネルギーの存在を明確にしたいと考えている私の問題関心からも大いに賛成です。

農業生産力破壊——分解の歪んだ進行——農民生活の枠組解体という道筋の上に具体的な農民の・生活破壊・の実相を広汎に報告し合う場合、農民生活の枠組解体とかかわらせて先の大会テーマである「家」の変容過程が追究されてよいと考えます。

さらに、・生活破壊・の実相の中に破壊されつくせない農民の生

活の論理といえるものが見出せるのかどうか、見出せるとすればそれはどのような展望をもちうるものなのか、といった点の究明が望されます。(以下略)

といっておられます。さらに、雪江会員は、

「(前略) 当日は残念ながら……参加できませんが、内容的には大変関心をもっているところです。と申しますのも、私のような仕事(社会教育)に関係しているものにとっては、・実践・政策科学としての社会学・の問題がつねに問われてきました、これからも問われていかなければならない状況におかれていますので。もちろん、このことは村研の会員の皆様に共通した課題でしようが。『研究通信』九九号での島崎先生のご提案には大賛成です。実は、私も、こ

の点についての問題を指摘しました。私が『社会科学の方法』第八卷第一号(御茶の水書房、一九七五年一月)に書いた「社会学における生活構造論について——社会教育とのかかわりから——」もその一端です。

研究会には参加できませんが、山形で開催されるメリットを生かして、この際、住民サイドでそれなりの活動をしている方、あるいは隣接領域(必ずしも学問領域にこだわらず)——現に生起している問題領域で——でプロフェッショナルな仕事に従事されている方に登場願って、素朴な、しかし、ナマナマしい意見を交換しあってみてはいかがでしょうか。私たち自身や学問についての反省の機会(一寸オーバーですが)として生かしてみてはと思う気持があります。

(以下略)

という考え方を述べておられます。なお、雪江会員の前掲論文は、彼の松原治郎編『社会開発論』社会学講座一四(東京大学出版会、一九七三年)所収論文への布施鉄治・岩城完之・小林甫氏らの批判

に対する反批判ですが、そのなかで『社会開発論』所収論文の要約の行なわれてる部分は、我々のこれから議論とも関連が深いと思われますので、ちょっとと読んでみることにしましょう。

「高度経済成長によってたらされた生活のひずみが、さまざまなか形での矛盾として露呈されつつある現代の状況において、生活構造論の課題を求めるにすれば、それは何よりも、現代社会生活にみられる矛盾の構造を具体的な生活次元においてとらえ、今日的な生活問題の論理構造を明確にしながら、一方でその解決に対処しうる有

効な理論研究を展開していくことではないのか。したがって生活構造論の内容としては農民の生活が破壊され、都市住民の生活が困憊し、非人間的条件が加速度的に再生産されている現状変革への要求が最大の願いとして含まれているはずであろう。すなわち、社会学における生活構造研究の今日的意義は、現代社会の基本的価値法則の論理構造をあきらかにしながら、その反映として具体化される諸現象をより正確に把握し、そこに示されている生活法則・生活の論理をうきぱりにすることによって、両者の、まさに今日的な相剋関係をあきらかにすること、そしてそれをふまえて両者の矛盾的関係を解消するための具体的方策を提示することではないか。したがって、このような立場に立つ生活構造研究はそれ自体が現実的であればあるほど一時にあれ、現代資本主義体制の合理的展開を求めるかたちで示される側面があることは認めざるをえない。さらに、また、これまでのわが国の経済・大資本中心主義的な社会開発政策に対して、ある程度の反省がなされているにもかかわらず、現実は、むしろそれとは相反するかたちで開発政策が再編されて具體化されている現状に対して、強固な抑止力を創出していくことが、さらに今日的な課題となっている。生活環境行政の貧困さと、一定程度の成果をおさめながらも、その弱さと限界性が指摘されている住民自身の組織的対応力の現状をみると、かかる抑止力は現実的な説得力をもつ理論研究とそれをふまえての政策的提案とによって創出していくことが必要ではないか。したがって、社会学における生活構造研究が生活の全体的把握の必要性を提唱するときに、その

必要性を提唱する背景にある問題意識と、全体的把握によって実際にしてどれだけのメリットをもつものであるかがきびしく問われなければならないのである。それ故に生活構造論の展開が抽象的・一般的な生活学の提唱におわってはならないことはいうまでもない。このように考えるならば、実態的概念としての生活構造概念を導入して展開される生活構造論は、その基本において生活環境の改造を理論化しうるだけの力を用意していかなければならぬのではないか。」以上が、私の手元に来ております意見です。ここで生活構造論とながら安孫子さんの方から話題提供して頂きたいと思います。

(安孫子) もともと生活構造論というのが、どういうものなのか我々あまりよく知らないで、社会学の方々が考える生活問題といふのははどういうようなアプローチをするものなのかなっていうことが、こっちでは一寸見当がよくつかないということがあるわけで、ただおととしのことになりますけど、仙台であります研究会の時に一寸話をしたのは、経済学の方からみて行つた労働者家族と農民家族の生活の違いがどういうところにあるかっていうことを考え方としては家というものの持つてゐる機能からいってみれば、労働者家族の場合は家というものが家にはなくなってしまつてゐるわけ

で、狭い意味の生活機能だけになつてゐる。それに対しても農民家族の場合には生産機能もあり、同時にそれが生活の組織でもあるという形でいわば人間の生きて行く本来的な狭い意味での生産と生活といふものが農家の場合にはある程度びつたりとくつついてゐる。もちろん、それは家だけで完結したら、完全な自給自足になつちやうわけですが、家だけでは完結してないわけですけれども、かなりまだそういう性格を持つてゐるのが農家だと、それに対して労働者家族といふものは少くとも生産機能はまずほとんど家といふものにはなくなつてゐると、そこから出てくる二つの種類の家族の生活構造の違いといったものを考えてみたい。例えば家族構成はどういう様に規定されるだらうかとか、財産の相続というのはどんな風に行なわれるだらうかとか、まあもつといふれば隣り近所とのつきあいとか、そのほかまあ家の持つてゐる基本的な生活機能といったものをどうおさえない、そもそも出発点が決まらないんじやないかといふ感じは持つてゐるわけです。ですからこの点については、多少理論的であつたり、あるいは歴史的であつたりするかも知れませんけれども、生活破壊ということを考える場合にもそもそもこの二つのタイプの家の持つてゐる生活機能といいますか、生活構造といいますが、そういうものをどうかできんとおさえて、それを少くとも共通の認識にして話を進めて行かなければいけないであらうという点は第一におさえておきたいわけです。そこで問題は、二番目に農家の生活といふものを考えるときに、通常、生産の単位であり、同時に生活の単位であるといった場合に、理想的にいえばそれは農業

所得で生活できるということになるんで、その農業所得を土台にして、その原則の上にどの程度農業外からの収入を積みあげて行つたういいか、社会学では何というか知らないですが、どの程度の生活水準があればということをその上に考えて行くと、ここでいう生活水準というのは、所得水準とか消費水準とかいうことではなくて、いろいろ文化的な環境とか自然だとかといったものを含んだ生活水準で考えると、それで基本的にはまかなつて生活の中味をよくして行くかと、あるいは新しくつけ加えて行くかということになると思ふんです。しかし、現実の生活破壊といふものは、一方ではその生活水準自体が問題になるんじゃないという、きわめて常識的な生活破壊といふ、実は貧乏という、一口でいってしまえば、貧困とか、公害で健康がむしばまれるとか、いわばそういう一般的な意味での生活水準の破壊といふことと同時に、農民の生活破壊を考えた場合には農業所得で喰えないという状況を、この生活破壊の中にそもそも入れるのか入れないのかということが一つは問題になるだろうと思います。つまり兼業所得と農業所得をたしてある程度の収入をえてやつと生活が維持できるというとき、それを農家としての生活破壊と見ないのかどうかということです。こういう風な形で十分な生活ができるといふのであれば、そして、まわりの環境と適当に文化的なものを持っていれば、それでいいということにもなるわけですけれども、農家のとか農民のといった場合に兼業所得が三分の二ぐらいあると、三分の一しか農業所得がないといった状態でとい

つた場合、一体これをどう考えるかっていった問題があるわけです。実はそれでいいんだという議論と、いやそれじゃ駄目なんだという議論とに分れるだらうと思うんです。ところが問題はそれを判定するときの基準を一体どこに求めるかということは実は非常に難しいわけです。非常に主観的に農民だから農業だけで喰えなきゃいけないんだという議論はいと簡単にできるんですけれども、なぜ農民が農業所得だけで喰えなきゃいけないんだということになると、それを客観的に、あるいは科学的に判断できる根拠っていうものはどこにてくるのかという問題にまでつきあたるわけなんです。人によつては逆に兼業と両方合わせて喰えりやあいいんで、農業だけで今頃喰おうなんていうのは間違いだつていう議論もおそらくあります。現在の政府なんかの考えているところはどうもそういうところがあるわけです。そうなつてくると、さきほどいいた貧乏、それから戦争だと公害だとかいうことで生活破壊が起きてくる問題と、もう一つおりたところで農民にとっての生活とはどういうのがノーマルであるのかという規定をしないと、農家の生活構造論なんていふのはそもそも組み立たれないのではないか、という気がしたんです。そこで今いつた農業所得で生活できるものだというこの是非を議論するときの基準は一体何であろうかということで、一つは生産力的にいつて一体どうなるであろうかという議論が今まであったし、これからもあるだらうと思うんです。ところが考えてみるとわかるように、農業所得で生活できない、兼業にかなりの時間をかけているという場合の生産力構造っていうのは、どちらか

つていうと労働生産性といいますか、時間あたりの生産性をうんと高めておいて余った時間を兼業にふり向けて行くというわけです。ですから、単作大経営つていいますか、機械経営つていいますか、そういうことは労働生産性をあげるつていう上ではいいことだとう判断がでてくるわけです。逆に農業所得だけで喰おうと思うと、家族の労働力を自家農業で完全燃焼させようと思えば、農業労働時間というのは非常にふえるわけで、それに見合うだけ生産物ができるかというと、そうじゃありませんから、労働時間あたりの生産性というのは一般的には落ちてくるわけです。それは機械を使わないで手でやつた方が家族労働の燃焼ということでは大いに意味が出てくるわけです。たしかに支出もそれによっておさえられるし、仮に所得が変わらないとする、その方が農業所得が増えるという当然のことになるんです。ただ、労働が非常にきつくなるし、かつてのように手作りの農業に戻れるかというと、まあ。そういう風に農業生産力の問題というのを考えてみると、どっちにせよやっぱりどこで、どういう生産力を選ぶかという判断をしなければいけないということがあります。で、どちらの生産力を選ぶかというその判断はどうでも循環論になつてしまつて、農家が農業所得で喰うんだつていう前提に立てば、労働生産性が落ちたとしても家族労働で農業をやつて行けるんだからいいんだということになるんですが、ところがそうではなくて兼業所得も合わせてやつて行くんだということになれば、どんどん機械化してあつた時間を農業外に働きに行つた方

がいいんだという議論になつてくるわけです。どっちが原因でどっちが結果なのか、どうも決め手がつかないというのが現状ではないだろうか。おそらくそういうことを最終的に判断するのは、社会観つていうか、世界観みたいなものに行つちやつて、階級的な収奪関係にとつてどっちがどうだつていう議論をやる、つまり低賃金労働者として兼業に行くつていうのは、資本にとって非常にプラスになつて、それは農業にとって決してプラスじゃないつていうような議論をやる、大変根本的な世界観みたいなところで、もう分れてしまつて、それ以降、農家の生活の見方ももうずっと変つて来るといふ、そういうことになつてしまはしないかという心配があるわけです。そんなところをどうやって詰めて行くかということがどうもひっかかるんじやないかということです。それからもう一つの見方つていふのは、さきほど一寸こういいましたけれども、労働者家族にとっては、いわゆる生活だけの単位つていうのは別にないわけですが、農村で暮してゐる、しかも農業をある程度やりながら暮してゐる場合には、果してこの一軒の農家だけ切り離した生活、都市の労働者みたいな「隣は何をする人ぞ」式の生活ができないといふ生活環境があるわけで、これは必ずしも封建的な共同体という意味ではなくて、何がしかの共同的な関係というものがある。それはまあ相互扶助といつてもいいわけですけど、そういうような生活条件が農村にはまだ残つてゐるわけで、それをやっぱり兼業なんかに行くことによつて大幅に変えて來ているという問題が現在あると思うんです。たとえば従来の契約講といったようなものが非常に變るとか、

村の規約とかいうものが大幅に變るというような問題もある。そういう変化を見ていけば、たしかに生活の変化ということも出て来るわけですけども、それによつてこの非常に従来の生活のしくみと違つた生活のしくみ、ある意味では生活の破壊といふような局面も現われているから、生活しにくくなつていて、あるいは隣近所と段々つきあいがなくなることによつて、自分一軒だけではどうにもならなくなつてどつかへ出て行かなくてはいけなくなつてくるといふ状況といふものが一方ではありうるわけです。もし、そのような生活条件というのを維持するのが正しいんだということになると、なるべく兼業なんかには行かないで、農業に多くの力をつぎこみながら、村の中の共同性というものを維持して行くといふ、そういう行き方が必要なんだという議論が当然出て来ると思います。とくに、最近、そういう議論つていうものが何人かの人から出されているわけとして、守田志郎さんが朝日新聞社から出した「小さな部落」なんていうのは、そういう考え方をとことんまで突き詰めたような考えです。一見逆戻りするんじやないかといふ感じが非常にするわけなんですけれども、そういう問題があるわけなんです。そのことを、そういう側面での生活の変化を我々はどうとらえるか、ということです。かつてはこれを農村生活の近代化とか民主化つていう形でむしろ否定してきたことなんですが、その近代化・個別化のために否定したものが結果的にみて必要だったと、だからそれをやっぱり大事にして守らなくてはいけないんだということなんですね。これはなるほど農民の生活ということだけでなくて、人間らしさといふよ

うな議論を背景として出て来るわけですね。その方が人間らしい生活などと。だから農業見直し論というのは一つの文明論になつてゐるわけとして、人間の生活をもう一回見直そつていうことにかなりひっかかりがあるわけで、隣が何をしてる人かもう全然分らんというような、そういう生活は非人間的である。むしろいろんな触れ合いを持った方が人間的だという発想がどうも非常に最近強まっているわけなんです。そういうのと同じ形で生活破壊というものを考えていいのかどうかということが実はあるわけとして、ぼくは今考へてているのは、いわゆる生活破壊の進行に対する批判というか反省と同時に、そういう一見人間味のうしろにつながるようなものが持つてゐる農本主義的な考え方というか、あるいは一寸ことばは悪いですが空想的なものへの復興みたいなものも非常に気になるつていうか、警戒しなきゃいかんていう気がするんです。そうすると、本来のそもそも農民生活のあり方は一体どうなのかなつていいますと、今二つあげた生産力な側面とか、あるいは村の中での共同生活といったような側面とか、つまり人間の触れ合いといつたような面での側面とか、こういういくつかの点でちゃんと吟味してみないと、そもそも生活破壊というものをただ単に出すわけには行かないような気がしてゐるわけなんです。同時に生活破壊といった現象が一体どこから出て来たかという論議からいうと、前後逆になるかも知れませんけど、その生活破壊を引き起して來た、先ほど雪江さんのお議論として紹介して頂いたように、高度成長、そして、その中でとくにこの農村に対しては外枠としては開発というようなこと、内

側の問題としては機械化、大型機械化という形に象徴されるようないわば生産性の神話といいますか、そういう内外両面からの政策によって農民の生活といふのは破壊されてきてるというか、非常に大幅に変つて來てているという点もやっぱり明らかにされなきゃいけないとと思うんです。この点は、しかし、農民の意識としてはわからぬと思ふんです。むしろ、そのような原因によつて作り出された生活破壊を一体どう見て、どっちの方向へ持つて行くことがそもそも大事なのかというあたりを単に主観的な問題ではなくて、科学的な問題として取り上げるには一体どうしたらいいか、おそらく経済の側からいえば、そのことが農業生産力というか、あるいはもつと広く日本全体の生産力構造からみて、一体農業の生産力はどうあるべきであつて、そのためには農家の経営がどうあるべきで、その上に成り立つ生活つていうのはどうなきゃいかんかという議論で考へられるんだろうと思ひますし、もっと別な側面からアプローチして行けば、今いつたようにこの村ん中でのいろんな生活であるとか、そこそこにおける生活破壊要因、そういうものをどうやって克服して行けばよいかつていうような、そういう点からの村の生活農民の生活も考へて行かなければいけないんじゃないかっていう気がしてゐるんです。私はあの、これは経済学の方にも関係があるんですねけれども、最近よくやつてゐる、いわゆる家事労働つていうものを社会的労働に置き換えて行くというとき、置き換える方、どうも洗濯機を入れても電子レンジを入れても置き換えていえれば置き換えですし、クリーニングに出してもいいわけですけれども、そういう問

題ではなくて、生産主体がみずから決定できる、あるいはみずから決定に参加できる、そういう置き換えていうか、いわゆるこの家事労働の社会化っていうことばなんですかけれども、単にこの資本の作りあげた商品とかサービスを探り入れて置き換えて行くというのは、本当の意味での家事労働の社会化ではなくて、自分が決定に参加できる、つまり、労働の疎外を克服できるような意味での家事労働の社会化っていう問題を出さないといけないんだろうと、で、その点は農村であろうと都会であろうと現在の生活の一番の土台、物質的な土台のことですが、その土台のあり方をはつきりさせられないやいけないんじやないかと思つているんですけれども、そのような家事労働のあり方の土台とするような農村の生活を追究する方向がもう一つ出て来ていんじゃないかというような気がしてゐるわけです。まあ、いきなり家事労働までおりて行くということは、一寸時間がなくて、今あまり丁寧に申し上げられないんですけど、おそらくそういうところまでおりて考えてくると、農村の生活の方向性というようなものが、もつとどう別な観点が出てくるんじやないだろうかっていう気がしてゐるんですが。それは経済学的な意味での、例えば農業生産力がどうあるべきか、そのためには農業経営なり、農民の生活なりがどうあるべきであるかという議論と違った形でおそらく議論が組み立てられて来るであろうと思います。ただ、そのことは突き詰めると、どつかでは同じ点に達するでしょう。もつと基本的抽象的な人間の歴史なんていう点では一致して来るだろうという気はして来るんですけども、アプローチとしてはかなり違う

し、経済学プロパーのアプローチの仕方と、それから経済学では從来やらなかつたいろいろな生活環境あるいは生活習慣というものを引つくるめた生活構造みたいなものからのアプローチとで、できれば同じような結論が出て来ることになると非常にいいことになると思うんですけど、さしあたりそういう二つのアプローチの仕方が生活破壊の問題についてはあるような氣がするんです。そこまで戻さないで、ただ生活破壊の実態だけとか、あるいはその原因だけを見ていたんでは、あんまりプラスにならないっていうか、従来、常識的に知つてることをただ詳しくテーマとして再確認するだけに終るんじやないだらうかという氣がしているんです。

(岩本) 安孫子さんにいろいろ問題を出して頂いたんですが、関連して細谷さんの方からも一つお願ひいたします。

(細谷) ほとんど私のいいたいところは安孫子さんにいつて頂いてしまつてるんで、あまりないんですけど、さきほど御紹介のあった安原さんのお便りのなかで、スタンダードな農民生活像は何なのか、ということをおさえないと駄目だという話がありましたけれど、これも今の安孫子さんの話とかなり通じるんだろうと思うんですけど、例えば農村にいって今年なんか非常にヒターン現象っていうんですか、出稼ぎができなくなると、それでまあ村に戻つて来るということがあった。そうするとその連中が何をするかっていうと、もう出稼ぎは駄目だから、例えば椎茸をやるとか、野菜をやるとか、そういうことをしようじやないかということを考える。やろうと思つても今度はなかなか市場との関係でとてもうまく行きそうもない

と、いや俺はやつぱりうまいってがあるから出稼ぎを続けるんだとか、という形で普通農民の生活つていうことを考えると自家経営の中で労働力を燃焼するわけですね。つまり、プラスアルファー導入するとか、あるいは複合経営をやるとかしてというのが、いわばノーマルな、スタンダードな農民生活の構造であるという、まあ從来我々が当然のこととして持つて来たイメージがあるわけなんですね。それが現場の農民自身の意識の中では最近は非常に簡単に相互転換しちゃうんですね。出稼ぎに行くか、野菜をやるかという形で。俺は出稼ぎに行くから駄目なんだとか、いや俺は農民として頑張るからホーレン草をやつたり椎茸をやるんだっていう、そういうのがあんまりなくつて、非常にこう気楽に選んじやつてるつていうところがあつてですね。そういうことの現状をみて行くと、先生どうしたらいいか、なんていわれると、いや農民だから農業だけで頑張れよ、ついうのもどうも何だか白々しくなつてくるつていうようなことになつて、そういう農民の生活構造つていうものの中に労働力の直接の商品化つていうことが非常に深く入りこんでいて、そういう中で今、農民の生活構造とは何ぞや、つていうようなことが改めて問い合わせなければならないということになつてゐるということは僕も非常に強く感じていましてね。おそらく、その点では基準として出て来るのは、一つは先ほど安孫子さんがいわれたような農業生産力とはそもそも何なのか、という問題と、もう一つは農民の共同の生活組織のあり方つていうものがどうなつてゐるのかっていうことが当然あるし、多分、僕も安孫子さんのいわれる今いつた

二つの方向からつめて行くのが必要なんだと思いますがね。ただ、その場合、やつぱりこれも安孫子さんがすでに御指摘になつたんですけれど、それじゃ今度はそういう従来の手労働にもとづく農業生産力がいわば機械化され、そのことによつて出稼ぎがどんどん増えたと、だからまあ複合経営に戻らうじゃないかと、これはまあ一つ私は正しい指摘だと思つてゐんですけど、あるいは逆にもう一つの面からいえばそういう共同の組織が破壊されて、例えば消防一つもできなくなつちゃつたと、やはり村に残つて皆で共同のあれを作つて行こうじゃないかと、これもまたもちろん正しいと思うんですけれども。うつかりすると、これがあの再版農本主義みたいなことになつちやつてね、それじゃあまた田植機やめて手植えにするとかね、それからまあ刈取機械をやめて手刈りにすればいいとかいう話になつてくると、また妙な逆転にもなり兼ねない。それじゃそういう新しい機械なり新しい生活物資、例えば手軽な食品等々の消費生活の手段をどういう風に組み込んだ形で新しい生活体系つていうものが作られるのかどうかつていうことになると、私には今んところまったく五里霧中で、答えが出ないんですけどもね、おそらく今、問題になるのは安孫子さんのお話しにもありましたように生活破壊という実態をただ報告するということだけではなくて、一体何を基準にして破壊になるのか、あるいは現在破壊されているのは事実であるとすれば、どういう方向にその解決の道を見つけて行くのかと、いうあたりでかなり見解が分れるし、うつかりすると再版農本主義にもなりかねないことがあるし、そこが大きな論点になるん

じゃないかと、私は思います。

(岩本) 今、安孫子さん細谷さんともに、再版農本主義つていつたことに陥るのは警戒する必要があるつていうことをいわれたんですけれど、私も最近この有機農業とか複合経営とかを唱え、農民は村について農業をやるべきであるという風なことを主張している、あるいはもつと住民運動なんかにかかわりを持つていて人たちの発言なんかを聞いてみると、日本回帰とか共同体の復権といったことがきわめて安易に、しかも流行的に使われていることが大変気になります。こうしたことが西欧化という形で資本主義化を進めた日本近代化の帰結である現在に対するやり切れなさ、とくに戦後民主主義の形骸化に対する絶望感に起因していることはわかります。しかし、それが西欧民主主義を至上と考え、一寸どぎついの方をしますが、日本社会をいたずらに古くみるところにみずから進歩性のあかしを求めているような進歩的文化人が戦後民主化の過程でふりまいた「バラ色の市民社会」が虚妄に終つたことへの反省からだとすれば問題だと思いますね。近代社会は一切の人間関係が商品関係を通して現われる冷酷な資本主義社会なのであって、それを「バラ色」にみるなど、そもそも幻想なんですよ。「バラ色の市民社会」など実現されなくとも、今日の状況はまぎれもなく資本主義社会なんですから。で、だからといってこうした状況を脱するのに、共同体を再興すればよしとするのは短絡にすぎると思います。果して共同体本来の性格を知った上で議論かどうか疑いたくなりますが、共同体は、いつもいうことですが、人間の生産力水準が低く、個人

が社会の基礎単位たりえぬ段階で、人間生存の前提として構成された集団なんであつて、そもそも個人の自由意志で作つたり離れたりすることができるといった性質のものではないんです。だからこそ、近代社会成立のためには、自我の確立の桎梏となる共同体としての「ムラ」や「イエ」は解体されなければならなかつたんですね。しかも、もう一つ日本の場合、重要なことは、我々が戦後民主化の過程で非民主的諸悪の根源として打倒の対策とした明治憲法的な「ムラ」や「イエ」は、実は本来の共同体なんかではなく、日本資本主義発展のための必要から存在を認められた擬似共同体にすぎなかつたわけです。それゆえにこそ明治以降の資本主義社会においても強固な存在たりえたわけなんです。このことを私はいつもいつてるつもりなんですが、なかなか理解して貰えません。しかるに、今日、共同体は上に対する抵抗の主体であり、かつ横に一定の自治規範を持つものだつたとして、その再興を主張する向きが結構あるんですね。まあ共同体の歴史のある時点で、そういう共同体もあつたとしましょう。しかし、そうした共同体は少くとも我々の記憶にある時代、あるいは今から三代前、いやもつと前にもなかつたことだけははつきりいえます。すると、我々の知るのはさきほどの擬似共同体だけなんです。だから現代における自治の根柢を共同体に求めるのは、近代社会を「バラ色」と考えたのと同様の幻想ですよ。こうした状況で共同体の再興をはかれば、現われるのは隣組と家族制度だけですよ。離型を過去に求める限り、「いつか来た道」に戻る危険が大きいのを忘れてはならんと思いますね。日本回帰なんていって

ネオ進歩的文化人が幹がつていると、とんでもない人たちを喜ばせることになつちまいますよ。まあ、こんなことが安孫子さんや細谷さんの口から再版農本主義ということばで呼ばれたんだと思うんですが、やはり、ここで明治以降の「ムラ」っていうようなものを考えるときに、それは共同体だつたんだという風なとらえ方をしてしまつてですね、それで議論するのはどうもおかしいんじゃないかと、私はいつもいうんです。だから私はここで擬似共同体なんてことは使つたわけですが、つまり人間の社会の中で共同つていうものはいつでもみられるわけなんで、それがいつでも共同体とは限らないというのがこれも私の年來の主張です。だから、今でも「ムラ」に行けば、相互のつながりなりなんなりつていう形の共同の組織はあるわけだけど、それを今度はその共同体として復活させようというような考え方を農業経済学者であるとか歴史家であるとかがいうことに非常な問題があるというような気がしてゐるんです。

(安孫子) そういう考え方の典型つていうのは、三一書房から出た『農に生きる』っていう五冊ばかりの講座ものですね。とにかく全体通じてそういう姿勢持つてゐるわけね。あれをやつてくると、この資本主義つていうものが持つてゐる人間史的な位置づけつていうものがまったく否定されちゃうんで、資本主義なしに人間の将来つていうことが出て来るということになるわけです。それで僕がまさつき世界觀つていうか社会觀つていう非常に漠然としたことばで表現しちゃつたわけですけれども、資本主義といふものの持つている人間史的位置づけなり役割なりつていうものを否定して、そ

の次に人間の未来像といつたものをパッと描けるものか、あるいはマルクスの立場に立つてやはり資本主義といふものが人類の未来にとつて必要な経過点である、非常に不十分というか、それ自体克服されなければならないものとして、必要な経過点であつたのか、最後はそこにかかる問題が沢山でてると思いますね。現在の農村の置かれている問題なんかでも、生活破壊といわれてるものも、いつてみれば資本主義の結果である、まあ資本主義の結果といつても非常に具体的に日本の六〇年代以降の高度成長、地域開発と生産性神話という、そういうものによつてもたらされた結果であるということは、すぐわかつたとしてもね、それじゃあやみくもにその原因をすべて否定してしまつて失なつたものを取り戻せといった調子で行くか、でなければそういう状態はそういう状態としてそこからどうやつてそれを克服するかっていう風に生活破壊をみて行くかというのは基本的な分れ道だつて気がするわけですね。僕はまさつきは家事労働なんていふことを突如いい出したわけなんですけど、それは前の疑問からいふと、とくに戦後になつて五年以降はつきりしてくるわけだけど、農家の家計費の下方硬直性なんてよくいわれる問題がありますね。肉体的最低限度まで下がるなんていうことはもうしないわけで、最低これだけは残しておくという現金支出は必要だつていうことが出て来るといふそれ自体が資本に取りこまれた結果で、家事労働が変えられて来るからそういう状態が起きて来ると思うんですね。だから、戦後の農家家計の下方硬直性つていう問題を本当にきちっとやろうと思つたら、家事労働がどれだけ資本によつて置

き換えられてしまつて、資本の利益のために、利潤追求のために組み替えられたかといふ。その吟味なしには下方硬直性の問題ついていふのはやつぱり出て来ないんですね。それが土台にあるから、その上に出て来る農民層の分解のしかたとか、分解とまで行かなくとも、農民層の行動を決定するような基準が大幅に變つて来るという問題があるわけで、その辺の物指をやつぱりはつきりさせないと、生活破壊つていうものをどういう風にとらえて、どういう風に規定するか、あるいはその先をどういう風に展望するかつていうことは出で来ないだろうつていう気がするんですね。

(岩本) それでこれはまあ一つ非常に具体的な例になつてしまふわけなんですが、山形県じゃ例の過疎山村なんかで集落移転というのやつてるわけなんですね。まあ白鷗町であるとか小国町であるとか、西川町であるとか、でやつていて、白鷗方式とか小国方式なんていふ名前でもつて呼ばれてるんです。これを県庁あたりにいつていろいろ話聞いてると面白いんですが、実際に計画立案した人たちに聞いてみると、上に課長や何かがいて話をしているときはともかく成功だつたつていうような話を我々にするんです。ところが、個人的に話してみると、実は非常にまづい失敗があるんだつていう風なことをいふんです。だから、役人としては失敗といえなければ、実際にやつてしまつた結果としてはどうもあればますかつたんじやあないかつていう印象を個人としては持つてゐるんですね。これは私自身が西川町に昨年の夏に行つたときに見て來たことなんですが、この町では四五年以来、小倉・太平・上小沼・四ツ谷・北山・征矢

形・高野・境道という八集落の集落移転をやつてゐるんです。最小が境道の一戸、高野の二戸中一戸、つぎが征矢形の一〇戸中五戸、北山の七戸全戸、さらに小倉の一〇戸中八戸、四ツ谷の八戸全戸、大平の一三戸中一二戸、最大が上小沼の一三戸全戸が町の中心である間沢地区に造成された移転者用の住宅団地に移つてきているんです。距離にしてそう近いところで五、六キロ、遠いところで二〇キロくらいの町内での移転ですか。それで移転してきた人たちがどういう風な生活をやつているかと云ふと、この町は別に中心部といつても大した産業があるわけではないから、単に移つて來たというだけであつて、新たに農外の仕事に町の中で就いた人もあるようですがそれども、ほとんどの者は今度は通勤農業という形で毎日もと居たところにある田畠に通つて、そこで農業やつてゐるんです。また移つてから早いところでも五年ばかり、まだ移つて一年目というのもあるんですけど、農作業のやれない冬にはやはり今までどおり県外出稼を考えているんですね。こういう移転つて一体何なのかつて疑問に思いました。まあ、私は新出作りなんて名前をつけてみたんですけど、年寄りたちはとても団地で百坪ぐらいの屋敷を与えられたところに居てもどうにも息が詰つてしまふかないからつていうんで、もとの家に戻つてそのまま住みついているつていうのがありました。まあ耕作期間中だけなら、もとの家がそれこそ出作り小屋の役割を果すんでしようけど、若い者たちは町の方の新しい家で生活するつていうんで、なんかこう変な二重生活になつてゐるようでした。これなんか明らかに行政によつて打ち出された生活破壊だと思いました

ね。これ実態調査をもつとやつてみる必要があると思うんですが、そのとき、何人かの年寄りといろいろ話ををしてみたんですけれども、彼らが異口同音にいうことは、「じいちゃん、ばあちゃん、もう何もしなくていいんだ」つていわれて、狭い家の中で大事にされて置かれるのに耐えられないんだと、やっぱりこの年になつても田んばにいたいんだと、畠を耕やしたいんだと、せめて庭の草むしりぐらいはやりたいだけれど、それやることもできないところに押し込まれてるつていうのは非常に辛いってことなんですね。まあ、こんな現象を呈するような集落移転があるわけなんですが、この町ではこのほか月山沢が寒河江ダムで水没するんで、その人たちもまたさきのとは別の団地に集落移転させられつつあるわけなんですが、このたちは田畠が水没してしまったわけで、さきのような出作りはやれない、しかし、町にはかかるべき仕事はないつていうんで、当面働き口に困つてゐるようです。もちろん、水没地の補償は貰つてゐるですから、さしあたり暮しには困るということもないが先のことはすい分と皆心配してゐるようでした。一層もつと都会に出たいつていう気持も強いようで、すでに何人もがそうして町を離れたらしくですが、町としては過疎化つていうか、要するに統計的な人口減を避けたいために、とにかく町内に移転するように勧めてるといふことなんですね。だから、どうもこの方は一たん移つても結局はどこかの時点では町を離れてしまうのが多くなるつていう感じを持ちました。それからこの寒河江ダムのできる奥にさらに大井沢つて部落があるわけですが、こっちの方は結局、一戸数も多いということ

で、集落移転計画が町によつてたてられたんだけれども、それに賛成しなかつたんです。それで集落移転はしないことになつたんです
が、そのかわり移転しないことが確定した時点から若年労働力を中
心に都市流出が始まり、なかに家を閉めて挙家離村する者が急に増
えてきたつていうんです。大体この何年間か部落で赤ちゃんの産声
が聞かれないとつていうんですね。赤ちゃんの生める世代が出て行つ
てしまつていないです。老人ばかりの部落なんですよ。で、そ
この七十才の区長さんがここ一、二年、切り花用のリンドウの栽培
に成功して、これである程度収入が確保できると、あと八年後に月
山を軸としたリクレーション基地が完成すれば、過疎化は喰い止め
られ、一旦流出した人たちもまた村に戻つて来るといつてゐるのは、
どうもこう信ずることが生き甲斐になつてゐるんだということを感じましたね。こういう形で、西川町という一つの町の中でいくつもの生活破壊の例を見出せるんですね。山形あたりじや、とにかくこ
うしたことほかもいくらでも例を挙げればあるんです。

(細谷) そうですね。やっぱりそういう一つの現実、さきほどの長谷川さん安原さん雪江さんなんかもいつておられるんですが、一
つは生活破壊の実態の種々層つていうものは出される必要があると
思ひますね。それいろいろな側面からおそらくあつて、一番普通
の農業所得だけでは喰えないから出稼ぎに行つてゐるといった農民
が外に出て行つて破壊かなんか知らないけど新しい要素を村に導入
して来るんで、それが家とか村の生活の共同の秩序とか組織とい
うものを破壊して行つて、それに代替する新しいあり方といふものが

ない、という形での一つの破壊つていうものはあるんでしょ。そのほかに、もつとドラマティックな公害問題とか、勝又さんあたり酒田の調査やつておわかりだと思いますけれど、過疎の問題なんかでもそうですが、その辺を整理してみて、破壊の諸相を明らかにするつていうことも一つの大重要なことだと思いますね。

(勝又) あのね。僕はこの宿題委員の方のさきほどどの意見とかね、それから安孫子さんが問題をかなり広くとらえながら整理してくれているんですが、僕がこれから申し上げたいことは、今、細谷君のいったことと関連するんですが、具体的な生活破壊の実態認識つていう安原さんのいつた第一の問題とも関連すると同時に、第二番目の生活破壊に対するスタンダードな農民の生活つていうものをどういう風に規定するかつていう問題にもかかわると思ふんですけど、一つはこういう事例があるんですね。これは非常に特殊な例ですかね、必ずしもそのまま生活破壊という問題に結びつくかどうかわからぬんですが、大潟村の問題ですね、秋田の八郎潟干拓の。大潟村つていうのは農業所得からいいますと、平均千二百万ぐらいとつてます。もちろん、そうはいつてもこのうちから負債を返して行きますから、実質はこれほどではないんですけど、しかし、生活水準はほかの農村にくらべれば高いんです。ところが、この村で農業生産にかかる労働力つていうものを見て行くと、もう五〇才台は全然入つて来ないんです。いや入れないんです。だから五〇才すぎると、あの辺の町の日雇労働に行つて、その収入でおばさんたちがギャンブルに沈没するつていうことが起きてんですね。こうなると、農家

の貧困性ということと、さきほど安孫子さんがいわれた生活の水準というか、そういうことを我々どのように考えたらいいかつていうような問題が改めて出て来ると思うんです。これは僕は素人だからよくわかりませんけれど、こういう問題があると思うんです。労働生産性の問題も含めましてね、僕なんか非常に単純な考え方かも知れませんが、労働力に対する等価交換の原則からしますと、一体農民あるいは農業生産者というものはプロということになるんでしょうか。つまり、労働の質の問題、労働の質に対する評価つていう問題が、果してあなたは農民であるというプロフェッショナルなその質と、我々素人が行つても農業に従事できるという、つまりオペレーターとしての技術力を持つていれば生産過程の中に入つて行けるという、そういうところの問題をどう整理するかつていうことも今までいた大潟村の五〇才台の人たち、その他、程度の差はあれ、機械化一貫体系の中の農業労働力の質の問題を含めて、主観的な方向性ではなく、科学的なものにもとづいた方向性に立つてやりさえすれば非常に面白いと思うんですね。それから赤湯は伝統的な果樹地帯ですがね、そこの中学生三年生にリンゴの花はいつ咲くかつていう調査をやつた結果、正解は二六%しかないんですね。そうすると、自分のおやじおふくろはリンゴやブドウを作つており、自分たちはそれでもつて養われているにもかかわらず、その程度の認識しかないんですね。こうなると、農家とか農業とかいうものが、農業従事者だけに関するものであつて、もう他の家族にとつては関係ないといふことになると思うんですね。この辺の問題からいふと、農といふ

生産の特殊性つていうものは、非常に単純に農工つて対比してみますと、労働対象が農の場合、生命つていうものがあるわけですね、作物にしましても家畜にしましてもね。その生命つていうものを作物が栽培したり、飼育しているんだというのが、農村社会の最も基本的な根幹にあるんだと思うんですね。これがなくなってしまったんでは、もうラボラトリーだと思うんですね、実験室だ、それは、だからビニール・ハウスみたいなものずっと並べてやつても、工場生産体制みたいなものになつていてるせいか、家族の中でも新しい世代、つまり子供たちはそれほど農業的農家のものにひたつていなっています。こういうことをみるのは決して私が農本主義だからではないんです。私自身、農本主義つてものにはつねに警戒的ですからね。しかし、それとは別に違つた意味でですね、農家つていうものはこういうもので、そういうことがなくなれば生活破壊だということになるんではないですかね。こういうことを科学的に見て行く必要があると私はいつも感じるんですね。これは安孫子さんの提示された第二番目の労働者家族の問題と農民家族の問題、あるいは農本主義的なイデオロギー、それから岩本君のいつた擬似共同体の問題とも含めて考えなくちやあならないことだと思いますね。そういうことを具体的な例について整理してみれば、その中に横たわっている、生活破壊、つていうものに対する我々の科学的アプローチの、そして、それからえられる将来の方向づけの現実の大きな課題が生まれて来るんじやあないでしょうか。

(細谷) たしかに農業つていうのは要するに生物生産でね、生き

物自身がこう伸びてく、その点が工業と違うわけなんですね、伸びてくのは、生き物自身なんであつてね、作物にしろ家畜にしろね。それにね、まあ人間が手助けしてやる、助力してやるというのが農業の本質つていうわけなんで、その場合、農業の生産力つていうのが人間なんですね。つまり農民の技能とか技術つていうのが非常に大きな生産力要素に実際になつているわけなんで、そして、それが今まででは家族、家があつて、おやじさんがいて、長男がいて、あるいはもつと若いのがいて、家族の中での知識の伝達とかね、技能の伝達とかいうのが一つ、それが非常に大きな生産力要素になつていて、そういう人的な要素がかなり主要な生産力要素となつてきだし、まあ今もなつてはすなんだと思うんですけども、その部分が非常に無視されて、いわゆる機械一本やりみたいな形でこう生産力の発展が非常に跛行的に行なわれていて、それが農民経営のあり方からいうと、単作化と結びついているんだろうと思ひますけれどもね。單作化と結びついて、そういう機械一本やりの跛行的なあれがあつて、それが農民の家とか村をこわして行く、それが同時にそういう人間的要素という面での生産力要素をこわして行くというのが、今、勝又さんがいわれたような形で現われてていると思うんですけれどもね。ただ、その場合に農民経営でいえばやっぱり複合経営がいいというような、あるいはそういう家とか、あるいは村の共同の組織というものが重要な役割だという場合、さきほど安孫子さんがいわれたように再版だか再々版農本主義だかなんかにならないような形で、それじゃあ新しい機械とか農薬だとか、あるいは生活面でいえば、

例えば生活様式でいえば自動車なんていふのが農民生活に入つてゐる。それが農民の生活の範囲をもう非常に大きく変えちやつて、それでリクレーションというと部落の中ではなくてゴルフ場に行くつていうような形で再編されてくる。新しい生活要素が入つて来た形で、どういう風に農業の經營形態が生産力なり、あるいはそういう生活のシステムなりつてものが再編さるべきなのかという、そこがまだなくつて、それが僕は非常に大きな問題になつてゐると思うんですがね。その場合に、僕よくそういうことをいふと、農家の人たちが、「それはわかつたと、そんなこと先生いふけど、要するに喰えなきや出るだけだ」というわけですね。それはその通りだと、僕は思うし、それはその通りで間違ひないんだと思うけれど、ただ、僕は農家の若い人たちなんかとしゃべつて、若い人たちが出稼ぎに行くつていうのはただ喰えないからだけじゃないんですね。離れて東京行つちやうとか、仙台に出ちやうとか、山形に出ちやうとかつていうのはね。だから純粹にこの経済的な所得計算だけで、こういう問題を考え行くとやっぱりどうも間違ひなんで、やっぱりもう少し、で、僕はその辺でよく農民としゃべつて「生きがい」論をやるんでひんしゆくを買うんですけれどね。「農民の生きがいとは何ぞや」って話をするんですけど、どうもその辺でもう少し農民の、きつきの話にまた戻つちやうんですけれど、生活のシステムつていうものをもう少し全体的にとらえてみて、それのあり方を、経済以外の例えれば教育だとか文化だとか、あるいはリクレーションだとか、そういうものを含めたものを考えて行くことが、家を単位

例えれば生活様式でいえば自動車なんていふのが農民生活に入つてゐる。それが農民の生活の範囲をもう非常に大きく変えちやつて、それでリクレーションというと部落の中ではなくてゴルフ場に行くつていうような形で再編されてくる。新しい生活要素が入つて来た形で、どういう風に農業の經營形態が生産力なり、あるいはそういう生活のシステムなりつてものが再編さるべきなのかという、そこがまだなくつて、それが僕は非常に大きな問題になつてゐると思うんですがね。その場合に、僕よくそういうことをいふと、農家の人たちが、「それはわかつたと、そんなこと先生いふけど、要するに喰えなきや出るだけだ」というわけですね。それはその通りだと、僕は思うし、それはその通りで間違ひないんだと思うけれど、ただ、僕は農家の若い人たちなんかとしゃべつて、若い人たちが出稼ぎに行くつていうのはただ喰えないからだけじゃないんですね。

(安孫子) 一方からいいますと、たしかに農業つていうのは生物の兼業をとめて地元にまた戻つて貰うつていつても、その辺が大事なんじやないかっていう気がするんですがね。

（安孫子） 一方からいいますと、たしかに農業つていうのは生物の兼業をとめて地元にまた戻つて貰うつていつても、その辺が大事なんじやないかっていう気がするんですがね。

生産だからつていうようなことがあつたり、それから生物生産だから、とくに自然循環が重要だつてことになりますね。じゃ、それでもとへ戻つて機械が駄目だつてという形で排除して、仮にまあ昔のようなやり方がいいと、よくあの昔の農民はいつたわけだけど、稻の顔色をみて、とかいういい方がありますね。たしかに、そうなつてみると、経験があるし、非常に技能的要素が強くなつて来るんだけど、他面からいようと、人間の生産力の発展つていうのは、一般的にいえば、こうしたことやればうまく行けるんだという、かなり一般化した科学的な一つの認識の上に立つて一般化して、誰がやつてもある程度まではうまく行けるつていうね、そういう状態で技術化するつていうか技術的な体系を作つて行くつていう問題があつて、農業でいうと米なんかについてはもうその状況つていうのはかなり前から出て来たと思うんですけれどね。誰が作つても上手下手つていうのは、そう極端な差はない、いくらか程度の違いがあるつてぐらいいもんね。そういう方向に進んで行くつていうことも、どうしても考えなくてはいけないんで、あまりにも名人芸的な技能だけにこだわつてしまふんでは、本来の意味での人間の持つてゐる生産力つていうものは進んで行かないだろうつて気がするんですね。これで南郷の農民に聞いたことなんですけど、田植機を使うと密植にな

つて非常に倒れやすいつていうわけですね。おととしササニシキがない分ひっくり返ったときは、田植機のせいだつていわれたんですね。そのとき、ある南郷の農家で、どうも田植機でやると、株間もうんと近くなるし、それから一株が本田さんのやつた統計みると平均七七八本で、多いのは一三本、一四本、それから少いのは一本二本つていうのもやっぱり出てくんですね。機械だから手で植えるほど、手だつたら四、五本ほとんど確実に、せいぜいこの三本から五本ぐらいの間で植わるわけでしょう、それが機械でつかむつていうと、ときとして沢山つかんだり、ときとしては一本ぐらいしかつかめなかつたり、むらが出てくるわけですね。そんなことで非常によくないつていうんで、機械の方を作りかえてしまいましてね、株間がうんとこのあくように、苗をこうつかむ奴の間隔を変えましてね、改良したわけですね。それからつかむ範囲も、うんとこう広くつかむんじやなくてね、なるべく狭い範囲をつかむようにして、平均五本ぐらいになるように改良したと、そのかわりゼロつていうのが出てくるんですよ。それはまあ仕方がないから、手で補植する。そういうやり方をして全然一反歩も倒さなかつたつていう農家もあるんですね。そういう形で考えるのか、本当の意味で科学的だし合理的だつていうことでないでしょうか。田植機をただ使うなんていうのは、むしろおかしいんで、稻なら稻つていう生き物に合うような田植機つていうのはどういうのか、そういう形に変えて来るつていうのが出てくるんじやないといけないし、基本的にはそういう方向なんだけど、ただし自分の家では田植機を買つたら家計費は大

幅に赤字になるというと、手でやるか田植機を買うかつていうと、またそこで具体的な条件の下で考えなくてはいけないわけです。ただ、ある程度買える余裕があるんだつたら、本当にそれが稻の生態にあつたような機械に自分でも改良してみるつていうような努力が必要だけど、ああいう行き方で考えて行けば、機械化つていうのは必ずしも悪くないと僕は悪くないと思うんですがね。

(勝又) そうそう、そうです。

(細谷) 私もそれをそういう趣旨でいつたんですが、生活面で例えれば自動車を農民が使わんというのではなくておかしんで、都会人以上に自動車は便利なんです。広いですからね、部落とか何かの間だつて。そういうものを組みこんだ新しい生活の知識つていうものをそれじやあどうするかつていうことがね……。

(勝又) そういうための努力つていつたもの積み重ねの方向でもつて行かないから、生活破壊みたいなものによつて、それが悪循環つていうか、しばられてしまつて、ニッヂもサツヂも行かなくなつているという局面がいろいろ生活矛盾として現われて来ているという面もあるわね。それは確かにそうだと思う。

(安孫子) それから生産力だけに則していうと、いろんな補助金を出すとかね、融資がつくからつていうことでね、いきなり大型機械を入れたりなんかという本来の家族経営の機械化体系に合わないような奴をばんばん入れて来るという、そこはさつきも資本にイニシアティヴをとられた置き換えたといったわけですけれども、そういう形での置き換えが生活の面でも出て来るし、生産力の面でも出

て来ると、そこに向つて、とにかくこれが新しい方向だとか、これが近代的な生産の生活たつていうことで追求して行くと、その先にはとんでもない生活破壊が待つてゐるつていうことになると思うんですね。やっぱり、これは一つの立体的な運動の問題にどうしてもならざるをえないと思うんですね。一がいに兼業に出ないで、農業だけで複合経営でも何でもやつて農業で喰う努力をしろといくらいくてみても、これだけじゃ駄目なんですね。

(勝又) それは駄目ですね。

(森) 私も今のお話の趣旨はよくわかるわけなんですが、この前一寸村へ行つた話をあとで申しあげようと思つてゐるんですが、生活破壊あるいは生産力破壊という場合ですね、置き換え問題が出てゐるわけですが、その問題はある程度ですね、考える手がかりというべきじやあないかと思うんですが、そういうものが少し出てるんじやないか、もつともそれは誰が出したかっていうのは、それは一寸問題だと思うんですが。といいますのは、この前私、一寸村へ行つて、「あんた方、今、簿記をつけてるか」と聞いたたら、「そんなことはもう必要ない」というんでね、「どうしてだ」つていつたらね、庄内の人人がいふんだけど、管理センターみたいのがあつて、農協で買つた品物つていうのがね、一五日おきにコンピューターでポンポンと出て来るつていうんですよ。村の人は、それを共同出資で作つたつていうんですよ。庄内の一円の村の人達の計算が二週間おきに出てくるわけです。ですからね、そんとき、村の人達はそんな莫大な金出してね、そういうもの入れるのが一体いいものか悪いものかつ

つて大議論したんだそうです。で、まあ結果において便利だつていふことですね、そういうもの設けるのに賛成したつていうんです。それはいいと思うんですけどね、そういう式のものがね、今、いろんな形であるんじやないかと思うんです。例えば、イニシアティヴがどつちかつていうことは別ですけど、今のは一例ですけど、ほかにカントリー・エレベーターですか、いろんな形で生産力体系つていふのかな、それに變つてはいなと思うんですよ。だけど地域つていう単位をとつてみると、農家の破壊つていうんですけど、生産力破壊と裏腹に何かまだそのあまり技術の上ではつきりとはないですけれどもね、地域単位にいろんな道筋つていうのが出て来ると、そういうものが一体何であるかっていうとね、こういうこともやつぱり生産力の問題を考える場合にはやっぱり必要なんじやあないかつて感じがしますがね。ですから個々の農家つていう形で行きますと、さつきの新農本主義つていうところにぶつかつてしまふんで、そこそこから脱出して行く問題が農家の方からは出てないかも知れないのでないんですね。非常な大規模で、細かく考えられたものに置き換えられているんではないかと思うんです。例えば水利体系にしたつてね、庄内なんかでみると、とても昔の農村で考えられないようなものでないんですね。非常に大規模で、細かく考えられたものに置き換えられている風なことを見てもですね、新農本主義で打開できるようなもんじやないという気が非常にするわけですね。つまり、私に総合的に見て行く必要があるんじやないかつて気がするんですね。

(細谷) そうですね、その辺、地域を単位にした農村生活のあり方が、今回、話が出ているように従来の部落を単位にした、そして、大体自家労働にもとづいた農業を家でやつて、その家が何軒か集まつて部落を作つて、そこでお祭りもやるし、あるいは屋根ふき井戸がえもやるし、あるいはもう農業労働の共同もやるという、そういういわば部落を単位とした共同組織つていうものは非常に破壊され来ると。それは確かにそうなんですけども、問題はそつから再版あるいは再々々版農本主義になつちやうと具合が悪いんで、そういうことはありえないことを、非常にイデオロギー的観念的に一生懸命にいうということだけになつちやつて、さつきから話に出ているように、「あんた田植機やめろ」とか、「手植えにしろ」とか、あるいはもう「全然自動車使わないで、部落ん中のお祭りだけやつろ」というわけには行かないんで、だからその問題を新しい生産力諸要素あるいは生活諸手段が出て来たその中で、どういう新しい生活なり経営のしくみつていうものを作つて行くかつていうときに、やっぱり僕は農家の人は達自身がどういう風に作ろうとするかつていうことが非常に重要なんだと思うんですよ。私なんかも農村へ行つて、農家の青年たちといろんなことしゃべると、「先生どうしたらいいか」つていわれると、「俺はわかんないんだ、あんたたちどうするんだ」つていうことを聞くんですが、それに向うから答えてくれないんで僕も答えが出ないという悪循環になつちやつてるわけなんですけども、ただ見ると若い連中なんかで、例えば誘致工場を入れる場合、その企業の汚水の調査をやつて、それで自分たちの部

落じやあやつぱりここに誘致工場を置くのがいいのか駄目なのか、しかし、また誘致工場が全然なくなつちやうと、これまた困る、それじゃあ誘致工場はどこに置いていたらいんだということを、村の中、行政村の中で、とにかく自分たちで考えようという動きが宮城県あたりでもないわけじゃないんですね。そういう動きの中で、それじゃ自分たちの今まで部落でやつていたことが、とても部落ん中だけでは解決しないわけですから、それをもう少し広い範囲でじやあどういう風に地域の生活組織をどう再編して行くかつていうことを農家の人たち、とくに青年たちあたりがこう自分たちの地域のまづ調査からはじめて、そして、考えて行つて行政なり何なりにぶつけて行こうという、そういう動きがやつぱりこれから一番大事なんじやあないかつていう気がするんですけどね。なかなか宮城県あたりで、それが非常に大きく育つたつていうのがあまりどうもないもんですから、具体的にこういう例があるというのを御紹介できないのは残念なんですけど、芽はいろいろあるんですね。青年会で今いつた誘致工場の調査をしてみたりね。

(岩本) さきほど、私が生活破壊の例にあげたのは、西川町みたいな過疎山村の中での集落移転にともなう話だつたんですが、もう一つ、これは今、私の住んでいる山形の南館、これはまつたくの都市近郊つていうか、急速にアーバニゼーションが進んだところで、私が八年前に来たときには私達の公務員アパートが田んぼの真ん中に立つてゐるだけのところだったのが、今は完全に田んぼの残つて入る部分が少ないつてことになつてしましました。実はここに田んぼ

として残そうとした人達もまわりが宅地になる、あるいは鉄筋の建物の日かげになつて田んぼとして使えなくなるつていうことが起きてるところなんですよね。ここなんかではまあ宅地として売れば、坪十万ですか、山形としては非常に高く売れるわけですから、そうして売った家は当面経済的にはよきそとに見えるんです。だけでも考えてみると、金と違つて土地というのは一旦手離してしまえば二度と戻つて来ないつていうことになるわけで、よしんば今いい値段として売つたとしても、今後もつとこの辺の土地があがるつていうことになると、どういうことになるのかつて、まあ他人の財産のことですが、気になるんですよ。第一、農家が田んぼを売つてしまえば、農家でなくなるわけですしね。ただ、ここに住んでみると、これは農家にとつての生活破壊つていうことになるんでしょうけど、こそこそともとここに住んでした人達が二百軒ばかりあって、あとは我々公務員アパートに住むのが五四軒新入りとして、町内会の中では少数派だつたんですよ。そうすると、町内会であま、その村社のお祭りをやるとときに旗をあげたりおろしたりする役とか、また町内会長が市会議員の選挙に立候補したときに選挙事務所にかあちやん達をお茶の接待の手伝いによこしてくれとかいうことを、我々アパート族に押しつけてよこしたりして、だいぶアパート住民といざこざおこしたわけなんです。ところが、今では勢力関係が逆転してしまつて、今では三百五十対二百ぐらいになつちゃつたんです。あとから入りこんだのが多くなつて。それで祭りもやめちまえ、あれもやめちまえ、これもやめちまえ、ということになりましたね。ま

あ僕なんかもそういうこといつた方なのかも知れないけど。祭りの問題もこれもとからいた人たちにとつて大事なのかも知れないけど、消防の問題というのは現実にもつと重要なんですね。で、ここはまだ市の消防署が火事になれば来るには来るが、初期消火には間に合わないんで、村の消防団があるんですよ。ところが、村の消防団で夜警やるというときに、もともと一戸持の者だけが出るつていうことになつていたらしくんですが、我々のような者が入りこんで来たり、また新しく家を建てて住む者が入つて来ると、あいつら夜警に出ないのはけしからんじやないかつていうことになつてね、私、たまたまアパートの隣組長やらされてたんで一騒ぎやつたんですけど、はじめはこつちが数が少ないから押し切られそうになる、だから町内会を抜ける抜けないつてことまでになつたんですね。こつちとしては、昼間、勤めて来て夜警には出れない、といつたら、先方も我々だつて最近では昔のように家にいて農業やつてんのほとんどいないんだ、やっぱり屋間あつちこつちに働きに行つてその上で出でんだけっていうんですよ。その事情はこつちだつて、まわりの田んぼがどんどん売られてるだからわかりますよ。そのうち、むこうとしては、夜警に出れないなら、かわりに日当出せつていうんですね。こつちはそんなのは税金の二重負担だから断わるつて、いろいろやりとりしたんですね。ところが、この頃は勢力関係が逆転したんで、むこうからそういうこといつて来なくなつて、もともと住んでいた二百軒の人たちだけで消防団を続いているようですね。それで今まで町内会長に会うと、まあ半分冗談だけでも、もともといた人たち

の方が町内会から抜けたいっていうんですね。それで新組織を作りました。こういうこといい出すのも、急速に都市化が進む、しかも行政の手が及ばないというところで起つてはいる農民の側からすれば大変な生活破壊だと思うんですね。つまりね、全然生活条件の違う者達が入りこんで来て、もといた人達のやつて来たことが何もやれなくなつて来るんですね、多数決つていうことでやるというと。

ある時期までたしかに部落多数決でもつてあとから入つて来た者を圧迫したけど、今それは逆転してしまつて、もとからの人たちの方が町内会抜けたいなんていうのは、これあつちこつちで多いんじゃなかと思ふんですね。とんでもない大工場や大団地ができたところではね。

(勝又) 仙台近郊でも同じだわね。

(安孫子) 泉市なんかでは今や選挙やつても何やつてももともといた人の方があぶないつていうんでね、大分頭抱えているようですよ。

(岩本) こうした現象を客観的にみてると、たしかに夜警に出ろとか、祭りの旗立てに来いとか、選挙事務所の手伝いに来い、なんていわれたときは腹も立つけれど、もう一步さがつて、自分のこととしてでなくみると、そういうことやるなつていわれる村の人達が非常に氣の毒だと思いますよ。彼らはそこともとと住んで、そういうこと長年やつて来てたわけですからね。あとから入つて来た人達が多くなつて思ふように行かなくなつて來たつていうんですね。それから、これはここ問題じやなくて、冬休みに相馬に行つ

たとき聞いたことなんですが、新しく入つて来た人が便所を水洗にするでしょう、浄化槽や何かつけて。ところがあれどうも余り完全じゃあないらしいんですね。それでもつて大変いざこざおこしてました。これは下水が完備してないから起る問題なんですかね。自分たちの屋敷内では浄化槽があつても、そこから先は要するに流れになつちやうんですね。

(細谷) これはあつちこつちでトラブルありますね。要するに田んぼの用水路にたれ流しになつて来るわけでしょう。

(岩本) これもやっぱり農家の側からみれば生活破壊につながるつていう見方になるでしょう。だから、我々の立場つていうのは、非常に面白い立場なんで、村落研究者として「ムラ」を見るときの眼と、自分が住民としてそこに住むときと、やはり相当矛盾しますよ。

(安孫子) いわゆる都市住民的な立場に立てばね、仮に自分の屋敷の中から浄化槽を通して、それを従来の用水路かなんかに入れちゃうんですね。ところが、この用水路の方は皆でせきさいやんすが、都市住民の立場からすれば、そういう水路の管理や何かも全部自治体でやれとかね、という要求になるんですね。ゴミを市役所で集めるつていうのと同じ発想にしかならんのですよ。下水完備するのは市町村の役割だつてという発想で行きますからね。しかし、片方からいえば、それだけの税金を出せるかどうかつていう問題から始まつて、出せなければ自分たちが使う用排水路だから自分たち

でやらなければいけないことがあるわけで、そういう人達で生産も生活も成り立つていたわけですね。ところが、実際都市住

民の方の発想からすると、家庭の生活っていうのは自分のまわりだけの問題であって、あとは全部自治体がやるべきだということになつちやうわけですね。それで財政上の問題なんかが全部出て来て喰い違いがいくらでも起きて来るということになつちやうんですね。

確かにそうなつて来ると、農民の方は、単にこの生活ということだけじやなくて、せきさらいというようなことを通して生産的な労働の方にも影響を及ぼして来ることはあるわけですね。

(細谷) この辺から農業のいわゆる共同の組織というものが、従来の部落の中でね、かなり自己完結的に生活の共同ということを、先にいつた井戸さらいから屋根ふきから水路清掃までという形でやつて来ていたのに、そういう形では非常に完結しにくく、いろんな意味でなつて来ているんで、そななると当然行政の問題にぶつかって行くんですね。生活単位が広がつて行くこともあるし、その辺がその農民のこれから的生活破壊に対する、島崎さんが何が破壊の原因で、何を斗いとらなければならないかっていうことをいつておられて、農村自治論ということをいつておられるわけだけど、従来の「共同体」に復帰するのではなくして、一寸違う新しい次元でそういう農民の共同性のあり方というものが考えられなくちゃあならないはずなんだし、その辺がどうなんですかね、僕はいつも農家の青年に聞かれると、いつも相手にあずけるつてきつきはいつたんだけど、わかんないんですね。島崎さんがここで重要な問題を出

しておられるんだろうと思うんだけれども。やっぱり行政を抜きにしてはできないんじゃないですか。

(安孫子) そうですね。さつき僕が生活のいろんな置き換えっていうのが、たしかにせきさらいを町なら町がいろんな人夫を雇つてやるとか、ゴミを昔は、いや農村なんかでは今だつてそうだらうけど、捨てるなんて頭はなかつたんですね。それが都市的なものになれば、清掃車が一週間に一回とか二回、三回とか必ずまわつて来て集めて行くというようになるわけで、そういうような置き換えつていのものを考えて行くとき、その置き換えつていうのが自分たちで決定できるもんではなくてはいけないつていうのがそこなんですね。自治体がやるつていうのは、自分たちが市町村長を選び、議員を選ぶつていう形で一応参加できるわけですね。それも無責任な参加でなく、つまり税金は出さないけれども皆やれとかね、こういう仕事を自治体でとにかくやれつていうんでは成り立たないんだから、そうするとどうしても自分たちが実際に参加して自分たちが考えて責任をとつたような形での行政のあり方というのを考えざるを得ない。そういうものに段々段々変つて来てるんじやないかと気がするんですね。用排水路なんてのは、実際、非常に難しいあれがあつて、この頃は用水路と排水路つていうのをかなり厳密に区別するつていうところが増えて来ているようですね。こつちは排水路だつていうところにはつきり分けてやるんだけど、そこに田んぼの排水だけでなく、家庭での下水も全部合わせて使うんだつていうことになると、どうしても問題がもう一つ複雑になつて来るわけですね。やっぱり行政

側かそこにかかわって来ないと、従来の水利組合的な発想だけでは最早解決がつかん問題が沢山出るんだと思うんです。

(細谷) 純農村でも養豚なんかの排水の問題があるでしょう。

(安孫子) あれはもう畜産公害なんていうんではつきり出て来ているんですね。

(岩本) これは山形の南館の私の近くといつても、まあずっと離れた山の方で養豚やつてる人の話なんですが、「俺があそこの山で養豚はじめたときは誰もあんなとこに人間いなかつた。それが今になつてあとから入つて来た者がそこに家を建てて、養豚は悪い悪いって、追い出そうつてするのはどういうことなんだ」つていうんですね。これはやつてる本人にとつてはやっぱり大変深刻な不幸だと思うんですね。彼にいわせれば、「養豚場撤去なんていつくる連中はとんでもない奴らだ。はじめたときはそこに誰もいないからはじめたんで別に何も問題なんてなかつたんだ。入つて来た奴が問題おこしてんじやあないか」つていうことになるんですね。

(安孫子) 飛行場と似てるんだね、それは。飛行場もまあこれ以前に作られたのがあつたんで、そのまわりに人が住むようになつて騒音公害つていうことになつたところも多いんですね。こういう問題はいろいろな事例があるんじゃないですか。結局は自分たちがこの問題をどうしなきゃあいけないかっていうことを考えなくちやいけないんですね。飛行場なんていうのは、簡単に行くかどうかはわからないけど、要するに飛行場が移転する気がなければ、騒音公害の及ぶ周辺の土地は全部宅地並みの値段で買いたれば一番現実的な

解決なんですよね。だけど、個々の農民のやつてる養豚場に、そんなことしてにおいの及ぶまわりまで宅地並みに買いたらせて、真ん中に畜舎置くようになつていうわけには行きませんよね。そこらへんまでになつてくると、この問題は一方では住民運動とか何とかという運動の問題だし、それから結局は同じことなんですが、行政つていつたつて住民運動の延長ですからね、そういう意味では上からの行政ではなくて本当に住民自身が決める行政というのも提起されてくる必要があるわけですね、こういう状況の下では。

(岩本) さつきの西川の集落移転なんか、何であのようしていくつもの集落がまとまって移転できたかつていうと、要するに役場の行政として手が及ぶのはここまでで、そつからはずれたところまでは面倒みきれないという形にしてしまつて、今、移つて來たら補助金出すつていう、これに乗り遅れたらもう駄目だという状況に追い込んでおいて強行したんですね。だから、町として面倒みることがなくなつた移転したあとに残つてているもとの家に、年寄りたちが夏の間だけでも行つて住みたいつていうことで現実に行つて住んでいるんですね。いや、冬だけどもあの老人たちが町の団地の方におりて来ているかどうかわからんんですね。そのまま何となく息子たちと離れて、行政から放棄された集落に住んでいるつてことも考えられるんですよ。だから、農民の生活破壊を考えると、三チャン農業の当然の帰結として老人問題つていうのが一つ大きくからんけど、要するに飛行場が移転する気がなければ、騒音公害らんくるんじやあないですかね。

(細谷) 昔の伝統農法と違つて、家族つていうのが老人がいて、

世帯主がいて、息子がいてという構造とね、伝統農法だと何となくそれがとうとううまくかみ合つて、役割分担がそれあるんですね。そうして一つの家の秩序が保たれているんですね。さつき勝又さんが大潟の農家についていわれたように、最近は若いオペレーターだけが農業やって、老人はやることがなくなるということなんですね。やることがなくなると人間はつていうと、これから先は人間論になつてしまいますが、困っちゃつて、それでギャンブルに行くつていふことにもなつてしまふんでしょうか、そういう問題もやっぱりかななり……。

(勝又) そういうものを裏返すと、農家の生活破壊の問題の顕在化ということになるとと思うんですよ。

(岩本) 年寄りたちはとにかく「じいちゃん、ばあちゃん何もやらなくていい、遊んでいてくれる」つていわれるのが一番辛いらしいですね。風呂燃そうといつたつて、プロパンのせんひねればいいだけ、草むしろうたつて猫の額みたいな西川町の団地ではむしる草の生えるのが追いつかないってあんぱいで、家畜にえさをやろうにもその家畜もいない、要するに何もないんだ、そんなところはともも住めないから、夏の間だけでもとにかくとの家に住みたいっていうのがきつきの話ですよね。ただ、行政の方がそこまで面倒みなつていうわけで集落移転したんだから、もしかとしてそこに急病人が出ても救急車も行かないっていう極端なことにもなり兼ねないんですね。行政の方が杓子定規に考えているとすれば。

(安孫子) 消防車も行かない……。それで、私たちが斎藤晴造

先生を代表者にしてやつた『過疎』の研究、まもなく本が出るんですが、徳島の例でみると、あそこの過疎地帯つていうのは、老人家族が非常に多いんですね。若い世代はみんな大阪あたりに渡つて働いているんですよ。時々帰つたり、仕送りやつたりしてね。細々と自分の喰べる分だけは老夫婦が作つてあるというのか、村の中に沢山残つているんですね。ああいう形での過疎が出て来るつていうのは、年寄りは都会に行つても何も働くことはないし、雇つてくれるところもないもんだから、結局村に残つている方がまだ生活基盤があるつていうか、とにかく人間として何かやることがあるんですね。自分の喰う分ぐらいの烟とか一反ぐらい田んぼを作つて飯米だけとるということはできるんですよ。ところが、今いつたような形で、村に若い人たちがいないから、村に税金も入つて来ないというようなことで、村の自治体としてのサービスがほとんどゼロに下がつちゃうという状況もここでは出ているんです。そういう形での生活破壊つて、普通まあいつてるわけだけど、しかし、それはそれなりにやっぱり生活として成り立つてゐるわけなんです。だからといつて、それじやあそこに若い者たちが一緒に住むことができるかつていうと、そんなことやつたらかえつて一家心中でもしなくちゃならないつていう状況がすぐ出て来るわけんですね。これをどういう風にみて、この問題をどういう風に解決するかつていうことを見通せないとね。ここではこういう風な形で生活破壊が進んでいますよといつても、どうにもならないんですね。

に孫の顔を見に行くけどもね、そこでどんなによくされても半月一月もいると帰りたくなつて帰つて来るつていうのは、要するに都市には住めないんですね。だから、西川町で折角町の中に集落を移して便利であろうということで移しても、そこには年寄りは住みつけないんですね。

(安孫子) おそらく生まれたときから育つた土地であるという執着みたいなものもあるだろうけど、一番大きいのはやつぱり細谷さんもいつてるよう、とにかくそこで自分が働いている、何か役立つているという意識を持てるか持てないかっていうことが、そこに住めるか住めないかっていうことの決定的なあれになると思うんですね。サラリーマンだって三年に一べんずつ転勤して、転々としてまわって歩くつていうのも多いんですが、それはそこへ行つて何がしか自分の仕事があるからそういうことやつておれると思うんですね。それがなくて、ただ家についてぶらぶらして気楽にしていろといわれたつて、生きて生かれないんじゃあないですかな。蟻居閉門を仰せつけられたようなもんでね。

(細谷) ところが今の農村で機械が入つて老人の仕事がなくなるといつても、その老人が五〇代ですからね。七〇とか何かになりや別かも知れませんがね。

(安孫子) それが逆に若い者だけがどんどん出て行つた村では、七〇になつても、あるいは死ぬまでそれこそ農業を必死になつてやらなくてならないつていうことになるわけね。つまり、若い者がいれば年寄りがはみ出るし、若い者が出つちまえば今度は年寄りだけ

がやんなくちゃあいけないし、つていう両方のタイプが出てくると思ふんですね。昔だったら、農業つていうのはやつぱり家業で、生産手段の体系がやつぱり土地を基礎にして全部あつて、家業だから親が子供に教えるというね、そういう形であまり教育なんていうのはいらなかつたんですね。家ん中で教育できて、ちゃんと農業やる労働力としては育つて来たんですね。それがそれだけの人がいるといふことになると、とにかく親と子とは全然別々の職業に就くといふようなことが一般化して来るわけですね。逆にいふと教育がそれだけ大事になつて、農業だけしかできないつていうんではどうにもならなくなつて来るし、また学校に行つてしまふと、農業の方は中途半端になつてやろうと思つてもなかなか出来んということになるんですね。そういうわけで就業構造自体が変つて来て、就業構造の違いが教育の受け方の違いになり、したがつて、それが生活構造の違いになるつていうような、そういう違つていうのは必ず分進行して來たと思うんですね。

(岩本) 今の社会では家庭内教育つていうのが役に立たないつていうか、無視されてしまつてゐるんですね。つまり、親のやつてゐるのを見て子供が覚えるつていう、農業なんかまさにそうだつたんですが、漬け物の味なんていうのは、母親から娘とかね、姑から嫁につつていう形で伝わるわけだけど、そういうものがいらなくされちゃつてるわけなんですよね。教育は全部、外にまかしちやうといふことになつていて、それなんか一つ生活の破壊の結果なんですかね、原因なんですかね。原因になり結果になり、両々相まつてますます

つていうことになるんでしょうけれどもね。

(安孫子) 一番大きい原因というのはね、やっぱり一つは農家経済のあり方がうんと変つて来たことに基本的な原因があると思うんですかね。それはまた同時に生産力的な変化をともなつて来ているわけですけどね。宮城県の農協が昨年だつたか、明けておとしになるかも知れませんが、「農家は野菜を作りましょう」っていう運動をやつたわけ、農協婦人部を動員して。

(細谷) 今もやつてますよ。色麻町へ行つたらやつてました。

(安孫子) この頃、町の人もずい分入つて來たからつていうんで、農村で八百屋はじめたらもうかるだらうつていうんでやつたら、買ひに來るのは農家ばかりつて話もありますよ。町から來た人達は猫の額みたいなところで一生懸命家庭菜園をやつてて有様で。(細谷) 色麻町に行つたらね、あそこで今、農協が牛を一頭ずつ飼おうつて運動と、野菜を作らうつていう運動をやつてて、そのために野菜作り講習会を農協が農民を対象にやつてるんですよ。それで非常にこのところその受講率があがつていてるつていうんですね。そういうわけで、さつき行政の問題が出たけど、やっぱりもう一つ農協が地域の農業なり農民に対するサービスをきめこまかにやる必要があるんじゃないですかね。今、いつた牛を飼いましょう、野菜を作りましょうっていうのは、純粹に經營だけのことではないんですね。まさに農民の生活を農民らしくやつて行こうという考え方があつて、しかも一時期にはかなりの年まで出稼ぎに出たと、それが今は全部Uターンで戻つてきて、野菜作りでも始めようかつていう

んですね。そこに農協が目をつけて、そういうような呼びかけをやつて、そのかわり畜産の販売なんかは、農協が本当に責任を持ち切れるかどうかまだ一寸難しいですけれど、姿勢としては責任を持とうと、ほまち稼ぎ程度でもね、ということをやつてているんですね。ああいうことは大事なことだと思いますね。

(勝又) だから一つはね、農家の経渋が大きく変つちゃつて、もう全部でしょ、薪炭だつてプロパンになる、屋根だつて瓦になる、全部金さえ持てば生活そのものは独立できるんですね。向う三軒両隣にかかわりなしにね。迷惑かけないで独立できるけれど、生活構造は独立すれば独立するほど独立になるわけですね。孤立すれば孤立するほど共同性つていうのがなくなつてきているでしょう。共同性がなくなつて来るつていうと、僕はある意味では農漁村の社会生活つていうものの地域性つていうものが全部なくなつて普遍化して、だからテレビで料理番組を放送すると、どこの家でも同じ料理になつてしまふ。さつき岩本君がいつたように、漬物をばあさんから母さんへ、母さんから娘へというものは、やっぱり地域性の一つのファクターだと思うんですよ。

(安孫子) その意味で家族 자체が切れちやつたんですね。

(勝又) そうそうそう。だからバラバラになつちゃんたんだよね、要するに。

(岩本) つまり漬物をつける腕を持つよりも自動車の運転免許を持つた方がはるかに有効だつていうことの中ですね。

今は全部Uターンで戻つてきて、野菜作りでも始めようかつていう

にする野菜が買えるんですよ。これ、野菜を作る手間考えたら大変ですからね。また、漬物そのもの買って来ても、よそで働いた方が稼ぎになるからね。そうなりや馬鹿馬鹿しくて、野菜なんか作つてられなくなるし、漬物なんかもつけなくなるのは当然ですね。そういうことが生活みて行く尺度の中に投影して来れば、当然、農家は野菜を作りましょつていう運動が今あつても一向に不思議でないんですし、それは経済行為じやあないんですね。何かしら農家つていうものを、いい意味で考えて、自分達で土に親しんで何かをつて行こうつていう試みなんだと思いますね。農業協同組合つていふのは、少し消費生活協同組合あるいは金融協同組合の機能ばかり大きくなりすぎて、生産自体は関係なくなつて来ていましたからね。物を売るとかなんていうことばかりが大きくなつてね。そういう農協が多いんじやないの、生産を二の次三の次にしてるのが。

(岩本) 農民のための農協じやなくて、農協職員のための農協なんてこともいわれますからね。

(森) まあ農協職員のためつていうことでないにしろ、やはり農協も赤字だしちゃ困る、黒字にしなくちやならないつていうんで、農協自体のために活動してるつていう部面は確かにありますよね。(安孫子) やつぱり一つの資本体つていいますかね。その側面からどうしても赤字だしちゃまずいつていう考えは働くでしょからね。利潤までは追求しなくともね。それはその採算で働く場合もありましょうからね。

(岩本) ただ、初期の農協はいろいろ生産に手を出して、大体失

敗して、その結果、今のような流通資本になつちやつたり、貸付資本になつちやつたりしたという経緯もあるんでしようけどもね。

(安孫子) この頃、この数年、今いつたようないろんな形での反省をあちこちの農協でやつて、農業のやり方を本気になつて考えようつていうようなね動きが出て来てはいるんです。ただ、変な方向に乗つかつて行つちやつた奴は、大型機械・集団栽培みたいなことに行つちやんたんですが、そうではなくて、もう少しじっくり踏みとどまろうつていうのが、いろんな形で出て來たつていうのはあるんですね。南郷なんか、さつきの農家が田植機を改良したつていう例を出したけど、あそこの防除機械はね、俗称南郷式つて、これはメーカーとタイ・アップして南郷で一番使いやすいようなものにしたんですね。それを今度はメーカーがよその村に行つて、これは南郷農協と一緒に開発した機械だなんていつて、売つて歩いたつていうんですね。そういうことやる農協が段々増えて來たんですね。とくに、そういう中で、南郷で小学校の先生が授業で小学校で教えようと思つて、専業農家と兼業農家の実態調べていたら、兼業農家でタクシーの運転手やつていて、娘がどつかで働いているつていう例なんですが、全部で四八〇万の所得があるつていうんですね。農業所得は百何十万かなんですが、こういう兼業つていうのはね、タクシーの運転手だから自宅から通勤ですよね。これ悪いつていいえないと思うんですよ。田んぼだつて結構反収なんかも高いし、こういう例をもつて来て、これは生活破壊だとはいえないですね。いや生活破壊どころか、生活水準は高いし、これが駄目だつていう根拠

はどつから出て来るかつていうんですね。そこんところが非常に難しいんですね。出稼ぎなんかで半年も家を離れてるつていうことになると、いくら収入が多くてもやはりおかしいっていうことになるでしょうけど、在宅通勤ですからね。仙台あたりのタクシー運転手と違つて二四時間交代ではないから、毎日朝行つて晩には帰つて来るつていうんですよ。

（細谷） それと誘致企業が相当倒産したりつてのがありますね。これは相当なものですよ、宮城県では。

（岩本） いや山形でもたいぶひどいですよ。それに企業本体は倒産しなくとも、白鷺あたりの日魯の缶詰工場のような進出工場の閉鎖なんていうのは、地元にとつちや倒産と同じですからね。

(岩本) 非常に健闘なんじやないですかね

(安孫子) それ小学校の教材に使おうとしているから駄目だつていつたんですよ。特殊な兼業ですね。これじゃ兼業がバラ色になつちやつてね。皆、兼業に行きたくなつちやいますからね。ただ、それが不景気になつて来た時に、どういう影響を受けるかつていうことまで突つこんで行かなくちゃいんしん、やっぱり基本的には低賃金労働で、どういう劣悪な労働条件で働いていて、そして、それが正規の労働者の賃金水準やら労働条件をどういう風に引き下げているのか、そこまで踏みこんでみて、考えてみて、この兼業は一体どういう意味を持つているのかつていうことを考えなくちゃいけないんで、ただ家計の面だけで議論したんでは、やはり農民の生活構造つていふのはとらえ切れないと思ひますね。

(岩本) それにやっぱり今度の不況によって生活破壊や何かのパ
ターンが変わったでしょうね。

(安孫子) 細谷さんがいつたように、今年は出稼ぎ先がなくなつたからね。さつき作ろうかてな具合に気楽に變つてくるんですね。實際、深刻な意味

(安孫子) ほかに山形県じやあ場所は一寸忘れました、多分村山地方だったと思いますが、缶詰工場で希望退職を募つてパートに来ている女人の人達を呼んでいろいろ説得したら、「じゃあ仕方ないから私やめましょう」つていうことで、ふたあけてみたらパートの女人人が全員くび切られていたんで、これ希望退職と違うつていうんで地労委に提訴したつていうの、昨年の一月か二月だったですが、新聞記事で読んだ記憶ありますね。もう一年近くたつてますね。何かこの退職予定者だけが別個に労働組合を作つたとかいつて……。

(岩本) 今、UターンとかJターンとかいわれているけれど、これは不況になつたから起つたのか、それとも起るべくして起つたのか、この点はどうでしょう。

(安孫子) 基本的には不況でしょう。ただね、前から感じている
んだけど、都会に出て行つたけど、期待外れだつて帰つて来るのは
数は少ないけどあるにはあつたんですね。ただ、家へ帰つてもどう
にもならんていうんで、この都會の中でゴチャゴチャになつちやつ
てね、どこへ行つたかわからんとか、変なところに入りこんじやつ
たとかいう者も相當あるんですね。

(岩本) それから一たん家には帰つて来ただけど、もう農業はやりたくないっていう格好になつて、UターンでなくしてJターン、家には戻つたけど、農業はやらないで別の仕事をやつてるっていう風なのも結構多いんじやないですか。

(安孫子) O型つていうのもあるんじゃないですか。三べん戻つて四へん出たなんていうの。W型つていう方がいいかな。

(細谷) 見てると今いったJターンでいうか、出稼ぎが駄目になつてね、戻つて来て、野菜作ろうつていい出したりするのは、やっぱり年寄りなんですよ。ファクターに二つの理由があつて、一つは、若い方が、つまり三〇代の方は、不況にもかかわらずなお働けるところがあるという、まあ四〇代が境となつて、もう五〇代になると駄目だというのと、もう一つは、野菜を作ろうつていうことに素直に入れる、昔とった何かがあるんですよ、中年以上には。若い方もともとそれがなくていきなり出稼ぎに行つちやつたんでね、要するにそういう気が起きないんですよ。そういう二つのファクターがあつて、Uターンして農業にもう一べん戻ろうつていうのは、どうしても年寄りだということがあつて、さつきいつた農協あたりでも牛を飼えとか野菜を作れとか、そういうようなこと大体年寄り向きに始めるということになつてゐるんですよ。

(岩本) それからまあ生活破壊の問題として、これは事務局なんかやつてると、村研に対する注文が来るんですけど、民俗学なんかの関係の人、あるいはそれにシンパシイを持つ人たちが、どうも最近の村研は経済学みたいなことばかりやつてて我々全然入る余地

がない、何とかならないかつていうことといつてくるんですが、今度の島崎さんの問題提起のなかに伝統的な生活枠組みの解体というような項目があるんで、そういう風なところで私はやはり民俗学関係の人たちにも積極的に入つて頂けるところがあるんじやあないかと

思ふんですけど。例えば年中行事とか祭りの問題なんかでもそうなんですけどね。私にいわせると年中行事を破壊したのは、大体もう新暦の採用にさかのばるんで、あれは旧暦、つまり月を基準にした暦でやつて來たんですからね。まあ、こんな問題なんか、村の年寄りに聞いてみると、盆踊りなんかでも、例えば西川の例ですけど、山の部落から降りて來て間沢の町でいくら盛大な盆踊り大会があつたって、どうも行く気がしないつていうんですね。これは相馬なんかでもあるわけで、今もう部落単位の盆踊りはなくなつて、市の中心部で大きいのが一つあるだけで、踊りに來るのは、これは距離の問題もあるけれど、大体が町の連中だけつていうんでね、農村の人たちの参加の機会がなくなつてんですね。

(安孫子) そういうえば、仙台も町ん中での盆踊りがどんどん盛んになつてますね。大都市の祭りつていうのは、もともと自分は見に行く方で、自分が参加する祭りじゃあなかつたんですが、このところ参加する祭りつていうのが都市で増えて来てね、農村の方が見物に行くつてというようになつて來てるんじやないですかね。

(岩本) 祭りつてついうのは、いまや農村から離れた人がやりたがるつてなもんですかね。

(安孫子) 一べん本当に農村から離れた人が、やっぱり農村から

離れてしまうと何かこう淋しいつていうんで、自分たちで盆踊りで

もやろうかつていうことになるんじやありますか。仙台の北山なんてところはもう三日ぐらい盛大にやりますよね。

(森) 一昨年、昨年あたりからそういうの盛んになつて来たんじやありますかね。私の住んでるのは山形の町中ですが、うちの辺り自体もそういうの始めてますね。市でやる花笠踊り、あれだけ見に行くんじやあ、とつてもじやないけど、面白くないつていうんで

(岩本) ただ、そういう形でやる盆踊りつていうのはどうですか。昔の形のままじやないんじやありますか。相馬市の連合盆踊りなんていうときに、唄を聞いてると、あそこは相馬盆唄の本場であるにもかかわらず、北海盆唄が出る、八木節が出る、何でも出るんですよ。相馬盆唄なんて影が薄いですよ。ああなりやあ、相馬の盆踊りじやないですよ。

(安孫子) 抽象的な盆踊りですね。

(勝又) ほくらの方、仙台のベット・タウンで泉市の黒松の町内会が、自治会から市会議員が立候補すると、盆踊りはじまるんだよ。不思議なもので、今までそんな気配もなかつたのか、突如として…。それでも五、六年になるかな、しかも年々盛大になつてきた。二日か三日連続して、本当にすごいもんだよ。

(安孫子) そういうこと村の中でもばつばつ出て来てるんじやあないでしょか。これもある村でね、村の運動会なんて絶えて久しくなかつたんだけど、やつたらね、皆喜んで集つて来たつていうん

でね、年寄りから若い者から。それはやつぱり昨年不景氣で、若い連中が意外と村中にいたんだね。そうしてやつたら非常に活気があって、これから毎年やろうつてことになつたそうですね。どつかでやつぱり生活回復みたいなこと、連帯を求めるなんていうと変な表現かも知れないけど、絶えずどつかにあるんですね。まあ、何かつながりを求めるつていうようなことが…。

(岩本) 運動会つていうと、私とこの山形の南沼原小学校だけど、もともとは南沼原村の村の運動会で、学校の運動会としてじやあるく、村の人達が全員参加してやつて来たんですね。最近、ここ人口急増地区で生徒の数が増えて来てるもんだから、そういう形でやつてたんでは、プログラムを先生の勤務時間内にこなして行くことが出来なくなつたつていうんで、学校の方で父兄の参加する競技といふことで一つか二つに限つちゃつたら、村の人たち、とくにもともと住んでいた人達が淋しがつて、いま日曜日に小学校のグラウンド借りて別に村の運動会やつてますよね。

(勝又) 僕んとこの黒松でも学校の運動会のほかに、そこ借りて日曜日に町内対抗のそれやつてますね。

(安孫子) 話は變りますが、その伝統的生活の枠組みつていう奴で、南郷に契約譲が四十いくつかあるわけ、江戸時代に出来たのから新しいのは、戦後出来たのつていうのはないようですけれど、昭和の恐慌期あたりぐらいまで出来て来るんですね。見ると階層によつて全部違うでしょ。新しいものがどんどん作つて來たとか、正式の名称と別にあれは侍講だとか、あそこは士族っていうか涌谷の

陪臣、家中侍がいるんでね、それから借屋講とかあつてね、それの成立と階層と機能とを解明してみると面白いと思つてゐるんです。

(勝又) それは面白いですね。

(森) それは無尽講とは違うんですね。

(安孫子) そういうのもありますし、違うのもあります。また、機能がずんずん変つてゐるのもあります。だから、その機能の変化をやつて現状での契約講を中心とした生活の局面というのはどうなつてゐるか、あるいはそこからどんな問題が起きて来るかつていうあたりを、いろいろな問題と引っかけながら現在の生活構造つていうことを明らかにしてみたいという気はあるんです。あそこは町村合併やつてない町ですから、四十いくつの契約講やれば大体明治からの動きはきちんと追えると思うんです。

(勝又) それから村規約つていうのありますね。

(安孫子) その村規約は庄内で一つ見つけてますね。

(細谷) えー、明治のね。古いのはポチポチしかないですね。三〇年代くらいからでしたかね。

(安孫子) 明治の前半がないんです。

(細谷) 藩政期つていうのは本当にもうポチポチとしか。北平田なんですけどね。牧曾根ですよ。現在までとにかくつながつてんです。一寸、欠けるのが、昭和恐慌期、あのあたりです。

(森) 私の知つてゐる、馬町では文化一年からかな、ずっと契約講つていう形で今まで来てんですね。

(安孫子) そういう奴を歴史的な過程をたどりながら、それは生

活の一局面にすぎないだらうけれど、その変化を少し広い視野で各時代ごとにおさえながらね、ずっとやつて行くつていうことがあつていいですね。共通課題でなくて自由報告の方でいいから、生活破壊つていうか、生活の変化を入れながらね。

(勝又) 安孫子さんが出された第一の問題点、前提条件の問題がないつていうと、現在の経験的なものをデータ毎にケース・バイ・ケースで追つてしまふだけで、一体何だつていう科学的に立証していくことは出て来ないと思ひますね。是非、僕は生活破壊つていう今日的な課題を見るために、そういうものが欲しいつていうか、それやらないと将来の方向性つていうものを学問的に志向するつていうことが非常に弱くなるつていう気がするんですがね。

(安孫子) どういう問題が村規約、あとでは常会の決定事項みたいな形ですととりあげられて来るかつていう、そこんところだけでも少し広い視野でおきえて行けば、かなり重要な変化つていうか、推移が出て来ると思うんですね。

(細谷) 経営の変化と結びつけて行くと……。

(安孫子) えー、経営とか、あるいは基本的な生産力構造の変化とかね。まあ、家計までは一寸つかまえて行けるかどうかわからなければれど……。特徴的な時代ごと段階ごとに切つて行けば、非常に面白くなるんじやないかって気がするんですけどね。

(森) 私のさつきいつた馬町つていうのは西田川郡の西郷村、えー大山の近くの町ですが、ここでは部落財政の資料がずっと統いて残つてます。毎年非常にきれいにとつてあります。あそこの部落財

政関係はよくわかりますよ。

(安孫子) 山はほとんどないでしょう、あのあたりは。それで部落財政があるつていうのは……。

(森) それは近くの下加茂もそうだけど、部落有財産は田んぼなんだな。谷地みたいなものを聞いて、部落が所有して、それを小作人に貸してんだな。部落が地主なんで……。その資料が小作契約書はじめ残ってんですよ。馬町もそうだけど、下加茂の方が規模が大きいですね。

(岩本) 僕としては、さつきから例に出している西川町をはじめ、小国とか白鷹とかの集落移転のてん末記を是非やつてみたいって気はあるんです。これは歴史家としてもどつかできちんとさせておく必要があると思うんです。ただ、今年は僕の場合は事務局なんで、一寸無理ですが……。これだと県とか市町村とか行政の方からも資料がとれるし、実際に移った農民たちの話もすぐ聞けるんですけどね。ここは大川君の入りこんでる村だから、彼がやつてくれる一番いいんですが……。

(安孫子) 西川ならば川土居の部落財政なら明治二二年ぐらいから昭和二五、六年ぐらいまで、資料が僕んところにあるんです。筆写した奴です。川土居のなかの四部落分があるんです。大体そろつてるんじゃないですかね、途中少し抜けてるところはあつても……。

(岩本) ところで話はずい分、具体的な展開をみてきているんですが、この辺でズバリいつて今年度の共通課題のテーマをどうしたらいいかつてということをやつて頂きたいんですけど。

(細谷) そうですね。生活でも生活破壊でも、結局どうなんですかね、農民の場合にはその場つていうのは、やっぱり家と村ですね。

(安孫子) 生活破壊というのは、島崎さんの問題提起でもわかるように、ちゃんとあれがついているように、ただ一般的な生活破壊でなくて、かつこつきの使い方しないと具合悪いことばなんですね。

(岩本) 我々がきょう話して来たのはもう少し幅広いところでやつてるんで、一寸、島崎さんの意図とは……。島崎さんのことばかりなり限定づきで使おうとされますからね。たしかに島崎さんの問題提起の中でも、伝統的生活枠組みの解体つていうことをいつてふだから、我々の今日話したようなことも当然入つていいんでしょ

うがね。なかなか会員のいろいろな意向をいれながら適当のテーマを決めるのは難しいですね。

(細谷) 生活破壊ということははつきり入れた方がいいですね。ただ生活としちゃうと、生活つていうことばは無規定的な概念ですから、焦点がなくなつてダラダラダラダラつてしまりますからね。今日の生活破壊つて、いうことに一応焦点を合わせて、そこから農民の生活とはいかなるものなのか、というように、どこか扇の要を作つておかないと、完全に拡散しちゃうおそれがありますね。まつたく無関係に祭りの話が出たかと思うと、別な方から出稼ぎの話が出て来るという形では困りますね。まさに現時点にシリアルに問われている農民の生活破壊なんだということに焦点を合わせておく。そして、それを解くために改めて農民の生活とは何ぞやということにたちかえらなくてはならないんですね。

(安孫子) 「農民にとつての、生活破壊」とは何か」つていう島崎提案をサブ・タイトルにしては……。それでもつて中味をはつきりさせて置く……。

(岩本) 「農業生活の歴史と現状——農民にとつての、生活破壊」とは何か——」つていうのはどうですか。

(安孫子) 歴史と現状がいいか、理論と実証がいいか。

(勝又) 歴史と現状の方がいいな。サブ・タイトルがつかなければ理論と実証もいいが、やはりあのサブ・タイトルつけて考えるときは、歴史と現状の方がピタつと来るな。

(細谷) そうねえ、生活破壊つていうことになると、理論と実証つていうよりも、歴史と現状の方が……。

(勝又) さつきの細谷君の願いの要つていうのにもどしつと合うような気がするんですよ。それに安孫子さんが最初にいつた農民生活の基本というか前提を明らかにしないと、生活破壊を問うということがばやけて来るといつた提案にも合うと思うんですよ。

(安孫子) 皆、喰いつけるし、しかもサブ・タイトルがきちんとついてるから収斂することはここだつてのははつきりしてますね。

(細谷) そこをテーマの説明としてキチッとして置くことが大事ですね。ただ、「生活破壊」とは何かつていうことを問うときに、じやあスタンダードな農民生活とは何なのかといふ問題はあるわけです。そのスタンダードな農民生活像如何を問うときに、もちろん理論的な問い合わせあるけれど、やはり歴史的な展開を問うというこ

とも必要なんで、そういう意味での歴史なんだと、あくまで。ただ、漠然と歴史を述べられたんでは困るんで……。

(安孫子) それは『研究通信』九九号六頁の島崎提案の中にも出ているわけで、「高度成長」の過程に広汎に進んで農民の生活破壊の現実から出発し、破壊される以前の「農民生活」とは何だったのか、それを破壊する力と破壊される側の農民との関係のなかで生活破壊の実相をつかんでゆく、現に生活破壊が進むにもかかわらず、よくいわれる生活擁護の斗いが何故広汎な農民をとらえないのか、「生活を守る」とは一体農民にとつて何なのか」というあたりは、今このタイトルだとそのままそつくり生きて来ると思いますね。「こういった一連の問題が農民・農村の現状分析と生活史研究として問い合わせていいと思う」と述べられてるわけですから……。

(勝又) いいですね、ピッタリじゃないですか。サブ・タイトルも生きて来るし……。そこに収斂されてくるというのが、誰が見てもわかるもんね。

(岩本) それでは東北地区の研究会では、「農村生活の歴史と現状——農民にとつての、生活破壊」とは何か——」というのが今年度の共通課題としていいじやあなからうかつていうことになつたと聞いてみることにします。どうも長時間ありがとうございました。

× × × ×

その後、宿題委員の吉沢四郎会員から次のような意見が寄せられました。

その後、宿題委員の吉沢四郎会員から次のような意見が寄せられました。

(前略)会報のはじめに、金沢大学々長豊田文一先生の「ご挨拶に代えて」の中に、「農村は単なる人の集団ではなく、一定の階級構成をもつて、有機的に結ばれた地域的・社会との見解をもつて、農村の健康管理を推進したわけであります」と述べ、「私どもの分野では、どうしてもその社会構造を看過しては、農村の人々の健康を作り上げることはできません」と書かれてあるのを読み、深い感銘をうけました。医学が現実の問題に直面したとき社会医学でなければならないことがわかつたような気がしました。豊田先生が「この農村医学も農村社会学の概念を頭から失えば、その特殊性を失つてしまふでしょう」と申されていますが、現代農村について農村社会学は果してそうした概念を提供しているのだろうか、と考えると、戦前の地主制村落、戦後の自作農村落についてはともかく、四〇年代後半以降の村落について混迷を脱していないと思います。このことを大川会員は「今日、とりわけ昭和四〇年以降の日本資本主義下における『農家』・『農民』・『農地→土地』・『村』・『行政区』の存立基盤と相互関連を改めて整理しなければならない時点に来ている」と述べていると思います。

「資本主義と家」という課題設定のねらいも一つはここにあつたと思います。これまでの研究の結果、もう少しテーマを具体化したらという意見があつたようですが、その具体化の方法として、農民生活破壊の問題が島崎会員より提起されたのだと理解いたします。島崎会員は一、生産力破壊と分解の促進、二、伝統的生活枠組みの解体、三、生活破壊の実相、の三つの柱を提起しております。農民

生活破壊へのアプローチとして基礎過程としての経済から村落構造への方法は妥当なものと考えますが、一の課題を日本農村の全体像として把える場合、地帯別に、例えば水田単作地帯、果樹地帯、畑作地帯なり、それぞれの農業生産構造を充分に明らかにして進めることが必要だと思います。二の課題は農民の伝統的な生活枠組とも関連し、村研会員の共通の関心事となる問題と考えますが、今日における部落の機能が問われると思います。島崎会員が指摘されたように、それは農村自治論としても問われることでしょうが、その場合、その担い手が誰か、ということが問題になると思います。総兼業化といわれる状況の中で、農村の中心的担い手はどの階層なのか、このことは又、農村環境整備、コミュニティ形成など諸政策の結果つくり出される「農村社会」の担い手はどういう農家なのか、といったことにも関連してきます。会員一般から「現段階における農民の主体の形成・ムラの形成」、「一九七〇年代の農家（農村）の性格と展望」といった課題が出されたのも、結局、今日の分解状況の中で農村社会の担い手の明確なイメージを持ちたいからではないでしょうか。いずれにしろ、「むら」の論議が担い手との関連で行なわれることが必要だと思います。また担い手との関連では、当然、展望とも結びついて、生産組織（共同経営）なども検討されることになりましょうし、それとの関連で、研究会において、コルボーズ、人民公社も検討することは意義あることだと思います。三の課題は、一の生産力破壊に関連して考察さるべきだと思いますが、村研メンバー外の例えれば農村医学者による報告、あるいは教育学者による現

状分析を入れ、総合的把握を志向してもよいのではないでしょうか。

島崎会員の提案にそつて、私の意見——感想というべきものを申し上げて参りました。（後略）

会 員 動 向

【新入会員】

工藤清光 中国農業試験場

720 福山市東深津四三〇

中国農業試験場

依光正哲 一橋大学 185 国分寺市南町一一二一八

【住所・所属変更】

北原糸子

380 長野市平柴台二八

酒井恵真 札幌大学 061-21 札幌市南区澄川三八九一二一六九

中島寅雄 宮崎医科大学 889-16 宮崎県宮崎郡清武町

医大職員官舎A-403

【住所訂正等】 前号掲載分

西尾 寛 東京教育大 156 東京都世田谷区宮坂二一一〇三

林荘二〇一 号室

古宮憲義 仏教大學 603 京都市北区紫野北舟岡町一一 千寿荘内

吉沢四郎 中央大学 192-03 八王子市堀之内一七五五一四八

南陽台四九一一六

【退 会】

榎本宗次

小山 隆（今年度大会終了時で）

つきの会員の住所が不明です。

遠西武士（日本育英会）・横田忠夫（東京都立大）・山口光男・根岸義夫・佐々木泰雄・木原健太郎

第一回大会予告

一月一二日（月）、本年度大会の主催校である山口大学の山本陽三会員が所用で、山形市上山市に来られたので、宿舎のよねや旅館を訪ね、大会開催期日および会場等についての打ち合わせを行なつた。その結果、一応の予定として、

日時 一九七六年一〇月八日（金）・九日（土）

会場 島根県鹿足郡津和野町・町営国民宿舎

ということとで、早速予約すること。会員各位の多数の参加が期待される。詳細（変更を含めて）は、次号以降で。

なお、山本会員は、共通課題を「農村生活の歴史と現状——農民にとっての“生活破壊”とは何か——」とした場合、次回の研究会で経済学・社会学の双方の視点から破壊以前の農村生活のタイプといったものを検討しておく必要があるのではないか、そして、その場合、農村生活を狭い意味での生活に限らず、もつと広く農法・生産組織・生活組織を一体にしてとらえるべきであるとの意見述べられた。また、「生活破壊」と近代化とみていいのか、そして、その意味で近代化反対ということが「生活破壊」を掲げる問題意識のなかにはあるのか、そうした見方と現実の農民の意識との間にギャップは生じないものだろうかという意味のことをいわれた。

◆ 後記 ◆

【研究通信】百号をお届けする。貴重な原稿をお寄せ下さった各会員に御礼申し上げるとともに、たまたま記念すべき百号を編集することになったことを光榮と存する次第である。もつと執筆をお願いをしていた方もあったが、きわめて世俗的な、また、それゆえに会計的に切実な期限に迫られたので発行を急いだ。今後お送り頂いた分については次号にのせることでお赦し頂きたい。それで、その切実で、さしつけた限界というものは、一月二五日から郵料の値上げである。とにかく今までの郵料の三倍以上になること、請け合いである。

そのために、本号を一月二十四日中に発送することから逆算しての止むをえない措置であった。しかし、今回の郵料値上げは会計上、実際にいたい。誌代の印刷費よりも郵料の方が高くなるのである。次号以降、何とか送付方法も考えねばならない。折りたたんで定型にしていることも考へている。名案があつたらお教え願う。どうも記念すべき百号で、愚痴をこぼすのは見つともないが、背には腹は変えられない。その意味でも当面、円滑な会費の納入が望まれる。

会費の納入といえば、前号で苛議請求的お願ひをした。その点は大変に痛み入っている。すでに御納入頂いた方も多いと思われるが、振替口座の関係で一旦慶應義塾大学の方に入り、それがある程度まとまったところで、こちらに連絡されることになつていて。その上で、領收証をお送りすることになるので、お含み置き願いたい。

ところで、今号は五〇頁という特大号になつた。百号記念だからといえど、その通りであるが、実は一月七日の東北地区での研究会

での討論が長時間にわたつたのを収録したため長くなつたのは御覧の通りである。討論要旨をまとめてのせればよかつたかも知れないが、共通課題が未決定の状態で、そのことを考へるために開いた研究会での討論過程をできるだけ詳細に会員各位に知つて頂きたいのである。一方で郵料の節約を考えながら、印刷費のかさむことをやつたのは矛盾であるかも知れないが、とにかく値上げ前に郵料を節約しても大部のものをお届けしたかった気持はわかつて頂きたい。編集を終える段階で、本年度の共通課題の提起者である島崎会員から、「農村生活の歴史と現状——農民にとっての『生活破壊』とは何か——」としたのでは、社会科学にとつての農民生活の破壊の事実を解説するという問題意識が稀薄になつてしまふのではないかとの懸念が示され、せめて主題と副題が逆にならないものかという意見が寄せられた。東北での研究会では、そうした懸念への配慮は十分にしたつもりで、その意味でも討論の過程を掲げた意味はあると思う。もちろん、東北での研究会で出て来たものはあくまで案である。できるだけ早い機会に拡大委員会を開いて、正式の共通課題が決定されることが望まれる。山形にて意を尽くしたつもりでも隔靴搔痒の感は免れない。

事務局をお引き受けしてから三ヶ月余り、この間、会の運営についていろいろな御意見を頂いた。村研には實に多岐にわたる問題に关心を持つ会員のいることがわかる。それが村研のメリットで、それを生かせるような会でありたい。その意味をこめて、村研草創期の会員諸氏の玉稿で飾ることをえた本号をお届けしたい。(Y)